

たなかけじゅうたく 7. 田中家住宅

1. はじめに

田中家住宅は六甲山系北側を西に流れる山田川が、呑吐ダムのダム湖である衝原湖に注ぐ手前の北岸に位置し、段丘面最奥の山裾に立地している。田中家はもとは庄屋であったと伝えられ、立地も集落を見下ろす位置にある。また東隣には北側山頂にある丹生神社への登り道があり、現在でも神社総代を勤められている。住宅は他の古民家と比較して規模の大きい東西棟平入りの建物で、当家所蔵の位牌や祈禱札には天保年間の紀年があることから19世紀前半頃の築造と考えられている。しかし、前身として火災で焼失した住宅があると伝えられていること、住宅の部材や小屋組に古式の技法が存在していることから、18世紀代に遡る可能性も考えられていた。

この度住宅改築の計画が出されたことにより、この規模の大きな庄屋の建物を移築することとなった。あわせて建物の解体、部材搬出後、地下構造の解明と、前身建物の有無、建物以前の状況を確認するために発掘調査を実施する運びとなった。



fig. 633
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要

層 位

現代の盛土・整地土、表土の直下で今回解体した建物の築造面を確認した。築造の際には建物基盤上を薄く整地していた他、基盤外周には凝灰質砂岩の切石を並べ、その内側には黄色粘土を貼って土砂の流出を防止していた。同時に東側の黄色粘土上は土間の床面として使用している。この直下で焼土や炭の分布を検出し、伝承どおり前身建物が火災で焼失した状況を確認した。火災建物の築造に際しては、北東から南西に傾斜する敷地の北側山裾部分を削り、南西側を埋め立てて建物基盤を造成していた。造成土の最も厚い部分は、西側隣接地との比高から約2mと推定できる。建物基盤には直径1~5cmの円礫を敷いていたが、その下から火災建物築造時に埋め立てられた井戸と埋桶遺構を検出した。基盤面の下では茶色系の土を4層、その下で淡茶青色疊混じり土の地山を確認した。茶色系土中から鎌倉時代頃の土器片が数点出土したが量的には少なく、散在的に包含していた。

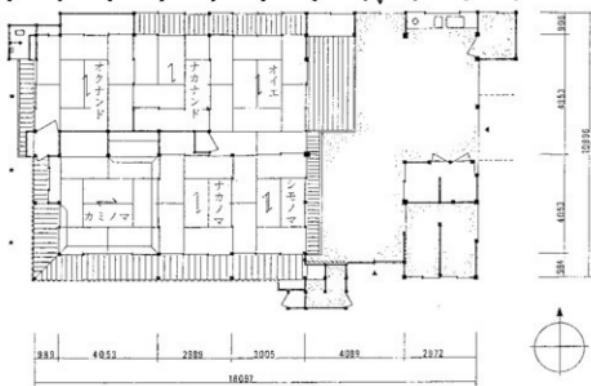


Fig. 634 開取平面図 『神戸の茅葺民家・寺社・民家集落』一神戸市歴史的建造物実態調査報告書一 神戸市教育委員会編 1993より引用)

解体建物 19世紀前半頃の築造と考えられている茅葺きの建物である。現在まで部分的には改修が加えられているが、大規模な改造はないようである。

礎石 矩石の設置方法には、建物基盤上から掘り込むもの、建物基盤上に置くもの、基盤周囲の黄色粘土中に埋め込むもの、火災建物の礎石を転用したものに分けられる。「る一」の柱と、柱間の東、来客用便所の近くの東は建物基盤上に置くものである。来客用便所の柱と、柱「ち一」・「ち二」、西側の縁の外側にある「ね三」・「ね五六又」・「ね八九又」の礎石は基盤周囲の黄色粘土中に埋め込むものである。構築順序を復元すれば、これらの3種類には若干の時間差を想定できるが、いずれも今回解体した建物を構築するときのものである。火災建物の礎石をそのまま転用したものは、建物東半の柱と縁柱、牛小屋の柱がある。石材は大きなものは花崗岩、小さなものは凝灰質砂岩であるが、そうでないものもある。柱筋の方向は磁北から 2° 西に振っているが、ほぼ東西南北に合っている。

牛小屋 建物の南東角にあり、現在は上にモルタルを貼っている。北端から1.3m南には南側に面を持つ列石があり、本来は上間の面から約30cm掘り込んだ後、列石以北は厚く、以南は薄く床面に黄色粘土を貼っていた。牛は列石の南側につないでいたと思われる。大きさは東西、南北ともに3mの方形であるが、当時はもう少し伸びていた可能性がある。

土間 建物の東側約3分の1を占める。現在はモルタルを貼っている。床面として使用している黄色粘土は基盤の外周と同時に貼られており、この部分での厚さは最大20cmであった。

台所 土間の北半で竈と水溜を検出した。竈は北東から南西へ6基が弧状に連続する形状である。火床の大きさは30~80cmで、東から西へ順に小さくなる。竈東端は未確認であるが、すぐ東隣には柱があり、7基目は存在しないと推定できる。竈は削平されており、上部構造は不明である。竈前面の作業場は土間面から約10cm掘り下げられていた。

水溜は直径、深さともに約1mの桶を埋設する。桶の周囲には約10cmの厚さで粘土を巻き、漏水の防止をしている。井戸からの水を一時溜め置くためのものと思われる。

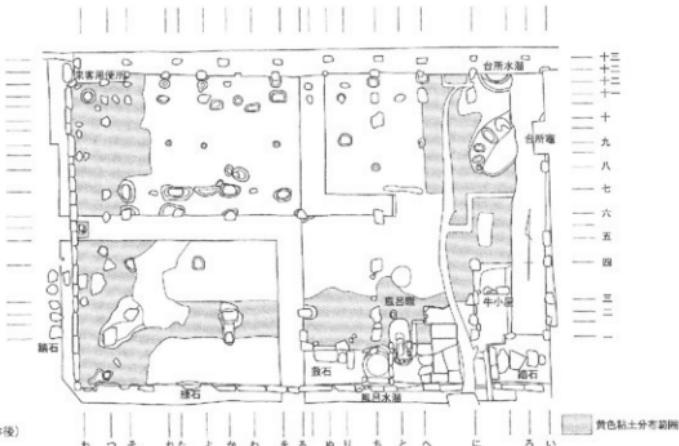


fig. 635
解体遺物平面図(解体後)
S=1:100

風呂 風呂の竈と水溜を検出した。竈は前庭部と燃焼部が瓢形に接続する形状で、全長約2mである。燃焼部は直径約80cmの掘形の内側に凝灰質砂岩の板石を内傾して立て、その内部は直径約60cmの火床を作っている。前庭部は風呂焚き時の作業場に相当し、長さ約1m、幅約80cm、深さ約20cmで土間面から焚口に向かって徐々に傾斜していた。浴槽は風呂釜でもある所謂五右衛門風呂であるが、風呂釜を撤去時に破壊を受け、風呂釜の据え付け方法は不明である。水溜は竈燃焼部の西隣で検出し、直径、深さともに約1mの桶を埋設している。井戸水を一時溜め置くもので、厚さ約10cmの粘土で漏水防止をしている。

来客用便所 直径約60cmの円形の掘形内に、直径約40cm、深さ約20cmの桶を埋設していた。建物基盤の外周には凝灰質砂岩が、便所の部分は花崗岩が並べられており、便所は建物築造以後に改修あるいは増築された可能性がある。

玄関敷石 凝灰質砂岩の板石を敷き並べている。石材個々の大きさや形状は揃っていないが、敷石の外周は概ね直線になるように揃えている。

下ノ間南敷石 風呂の西隣で縁へ上がる構造物に伴う敷石である。南側に凝灰質砂岩の板石が、北側には直方体の切石とその両側に板石が置かれている。南側と北側には約5cmの段差がある。

上ノ間西踏石 上ノ間の西側で縁へ上がる踏石が置かれていた。大きさ30~60cmの不揃いな石を、南から5石目で東に折れるよう、飛石状に7石配置する。石材は玄武岩質のようである。7石目と8石目は建物基盤上に置かれているが、建物築造以後に置かれた可能性が高い。

基盤周囲縁石 基盤の外周に並べた凝灰質砂岩の切石である。基盤の西側は黄色粘土を貼ると同時に並べ、南側は火災建物の基盤を掘り込んで据えている。基盤の外周を区画するとともに、雨水等で土砂が流出するのを防止する意図があったと思われる。

小臺埋納遺構 来客用便所の南側、建物基盤上に貼られた黄色粘土の下で検出した。この周辺の粘土は特に厚く約30cmあった。直径約20cm、深さ約15cmの穴に、瓦の破片で蓋をした瀬戸焼と思われる片口の小臺を埋納していた。火災後に建物を再建する時の地鎮の可能性がある。

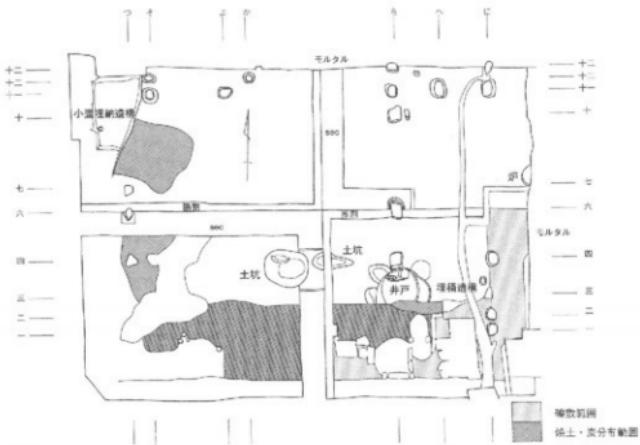


fig. 636 火災建物平面図 S=1:200

火災建物 基盤上に貼った黄色粘土の下で焼土や炭が分布する状況検出した。田中家には7代前に火災にあったといい伝えられていたが、この焼土や炭の分布は、家伝どおり前身建物が火災で焼失したこと示すものと思われる。ただ焼土や炭の分布は偏在している。建物基盤の南と西側には濃密に分布しているが、北と東側には全く分布していない。基盤中央は火災後の整地で削られた可能性もあるが、基盤の片側のみに焼土や炭が分布することは、火災は跡形もなく全焼とまでには至らなかったと思われる。

礎 石 今回解体した建物の礎石には火災建物の礎石をそのまま転用したと考えられるものがある。これらは火災後の整地土や黄色粘土の下で、初めて掘形を検出できたものや基盤上に置かれていることが確認できたものである。これらは焼土や炭が分布する部分にも若干存在するが、多くは焼土や炭が分布しない建物の東側に偏在する。再建時、火災の影響がなかった礎石はそのまま使用し、損傷した礎石は新たに据え直したものと考えられる。

礎 敷 建物基盤の南と東側には礎が敷かれていた。南側の礎は東側より若干小さく、それぞれ1~2cm、3~5cmである。礎敷の南端は火災後の基盤縁石を設置した時に破壊され、どこまで続いているか不明である。礎敷の東端は東方へ傾斜している。既設構造物のため調査ができなかつたが、今回解体した建物の東端の柱は、レベル的に火災建物には立っていないかった可能性がある。したがって火災後の再建時は東に規模を拡張して建てたと考えられる。南側の建物規模の変化は不明である。

炉 調査区域の東端で炉を1基、ほぼ中央で土坑を2基検出した。炉は現状では長径約80cmの楕円形であるが、区域外に続くため全体の形状は不明である。深さは約40cmである。壁面は非常に良く焼けているが、粘土等は焼いておらず地山の土のままである。火災後の黄色粘土で埋め立てられていた。西側の土坑は長径1.8m、短径1.5m、深さ30cmの楕円形である。埋土は淡灰茶色粘質土で、底には炭が、中程には腐植土が薄く堆積していた。東側の土坑は長さ1.8m、幅0.7m、深さ10cmである。埋土から鉄釘が1点出土した。

地 鎮 柱「つ六」と、大黒柱である柱「ち六」の礎石掘形から、土師器小皿を埋納状態で検出した。ともに火災建物から転用した礎石で、火災建物築造時の地鎮と考えられる。他にも築造時の地鎮が存在した可能性があるが、再建時に礎石の据え直し等で掘り取られたと思われる。

柱「つ六」の掘形西側で、礎石に立て掛けた状態で検出した。直径6cmの小皿内面を内側にして2枚合わせて埋納していた。小皿の内部には何も入っていなかった。

柱「ち六」の掘形からは、西、北、南側の3ヶ所で小皿を検出した。いずれも小皿2枚の内面を合わせて埋納していた。西側は直径6cmの小皿を礎石に立て掛けている。北と南側は直径9cmの小皿を掘形上部に水平に埋納していた。この4枚には墨書きの文字があり、北側の上皿は外面底に「天」、口縁の四方向に「子」「卯」「午」「酉」、下皿は内面に「天地大力代方 奉祭」、南側の上皿は北側と同じ「天 子 卯 午 酉」、下皿は内面に「奉祭さんぜい 吉方」と書かれていた。ただ「子卯午酉」の書かれていた順序は方角と合っていたが、置き方は南北逆転し、「午」を北側に向けて置かれていた。土師器はロクロで成形された、底面に糸切りの痕跡を持つものである。

前身遺構 火災建物の礎敷の下で、建物築造時に埋め立てられた井戸と埋桶遺構を検出した。

井戸の掘形は直径約2mの円形であるが、埋め立て時に崩れたと思われる部分が西側にあり、その部分が大きくなっている。新築する建物の基礎工事に影響がでないよう、井戸と判断できた約80cmの深さまで掘削した。北側には崩され残った石積みの枠組が残っていた。埋土は上から淡黄灰色疊混じり土、黄色粘土、灰茶色疊混じり粘質土、黄色疊混じり粘土、灰茶色疊混じり粘質土と続くが、いずれも人為的に埋められた土である。江戸時代前半頃の染付磁器の他、陶器、瓦が出土した。

埋桶遺構は井戸の掘削で西側が破壊されているが、直径約1m程の桶を埋設したものと思われる。深さは約60cmである。周囲に粘質土を貼って漏水防止をしているが、桶自身は抜き取られて窓の圧痕が2条残るのみであった。埋土は褐色疊混じり粘質土である。陶磁器、瓦が出土した。

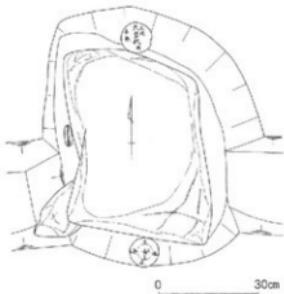


fig. 637 柱「ち六」地鎮 土師器三出土状況図



fig. 638 火災建物築造時の地鎮（柱「ち六」）

3.まとめ

田中家住宅は19世紀前半頃の築造と想定されている規模の大きな庄屋の建物であるが、田中家に伝わる通り、火災で焼失した前身の建物の存在を確認した。また火災後の再建時には使用可能な礎石はそのまま転用していたこと、東方へ規模を拡張した可能性があること、建物基盤周囲に粘土を貼って補修していたことを確認した。そして建物以前には井戸等があつて建物築造時に埋めたこと、敷地の南西側を大規模に埋め立てて建物基盤を造成していたことを確認した。平成5年3月神戸市教育委員会刊行の、「神戸の茅葺民家・寺社・民家集落」—神戸市歴史的建造物実態調査報告書一では、下ノ間の土間境中央の柱が前身建物の名残である可能性を指摘しているが、発掘調査でもこの柱の礎石は前身建物からの転用であることが明らかとなった。

今回解体した建物と、火災にあった建物の築造された時期であるが、解体した建物の築造は田中家所蔵の位牌や折檼にある天保年間の紀年と、今回出土した瀬戸焼の小壺からおよそ19世紀代前半頃、火災建物の築造は地鎮に使用されていた土師器小皿と、埋め立てられた井戸から出土した遺物から、およそ18世紀代頃の築造と考えられる。

また、鎌倉時代頃の土器片が出土したことは、周辺に遺構が存在する可能性が高い。敷地東隣には丹生神社への参道があり、神社に関係した施設であったとも考えられよう。



fig. 639 解体前の田中家住宅

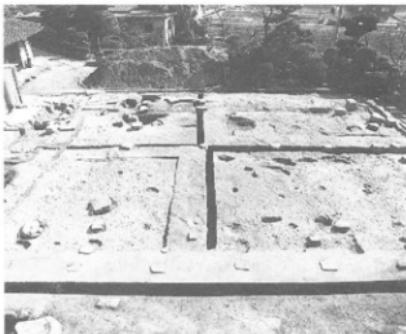


fig. 640 火災建物 基礎



fig. 641 柱「ツメ」地脚



fig. 642 小壺（瀬戸焼）埋納状況

ながた じんじやけいだい 8. 長田神社境内遺跡 第8次調査

1. はじめに

長田神社境内遺跡は、茹藻川によって形成された標高約14~17mの沖積地上に位置している。これまで再開発事業や道路拡幅に伴い、発掘調査が5次におよび実施されている。その結果、縄文時代~中世に至る集落が確認されている。中でも、弥生時代後期から古墳時代には堅穴住居が比較的の密集して確認され、鎌倉時代の井戸や掘立柱建物も多数確認され、比較的規模の大きい集落がこの地に営まれていたことをうかがわせている。

今回の調査は、阪神・淡路大震災によって被害を受けた宮川小学校の校舎の全面改築に伴い、校舎部分を4月から7月にかけて発掘調査を実施した。その結果、当初予想されていた遺跡の範囲を越えて、遺跡が拡がる可能性がでてきた。校舎の北側に隣接する給食棟部分にも遺跡が拡がる可能性があったため、試掘調査を実施し、遺跡の拡がりを確認し本調査を開始することになった。



fig. 643
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

基本層序

西側部分については旧校舎の基礎の搅乱のため遺跡はすでに消滅していた。

基本層序は北と南で段差があったため、北側を基準とする。第1層 ($T.P = 17.9m$) がグランド整地層及び搅乱、第2層 ($T.P = 17.1m$) が旧耕土、第3層 ($T.P = 16.9m$) が床土、第4層 ($T.P = 16.8m$) が中世の遺物包含層(暗緑灰色砂質土)で、第5層 ($T.P = 16.7m$ 、オリーブ黒色砂質土) の上面が第1遺構面になる。第6層 ($T.P = 16.5m$ 、緑黒色砂質土) となり、第7層上面が第2遺構面となる。第5層、第6層も中世の遺物包含層となるが、遺物量は少なくなるようである。

Ⅱ区南は第1遺構面を削るような洪水砂があることと、Ⅱ区北よりⅡ区南は近世の水田面が一段低くなっていたため第5・6層が確認されなかった。しかし、第1遺構面の遺構が深かったためもあり、第2遺構面で第1遺構面の遺構も検出されることになった。これより下層で遺構は確認されていない。

検出遺構

今回の調査では、北地区では遺構面が2面確認されたが、南側では基本層序でみたような理由から1面のみが検出されている。しかし、遺構の埋土から第1遺構面に伴う遺構か、第2遺構面に伴う遺構かの判別は可能であった。第1遺構面に伴う遺構は土坑4基、溝状遺構3条、不定型落ち込み4基、ピット37個などがある。

第1遺構面

S X12

落ち込み（S X12）は北側を溝（S D22）に削平され、南側は洪水砂によって削平を受ける。東側が調査区外へ拡がるために、規模については明確ではないが、現状で東西、南北ともに3m以上で、深さは約40cmである。西側には落ち込みの傾斜面に人頭大以上の巨石で、石垣状に組んでいる。落ち込みの底面は、北から南へ緩やかに傾斜はしているがほぼ平に仕上げられており、小さな池か水溜状の施設であった可能性もある。埋土中には、須恵器や土師器の小片が出土したが、底面には須恵器の大甕が1個体と備前焼のすり鉢が1個体出土している。時期は鎌倉時代後半から室町時代前半に比定できると考えられる。この落ち込み（S X12）の西側の遺構面上には、土師器の羽釜、瓦器楕・三足器、土師器小皿等が比較的の密集して出土しており、何らかの関連もうかがわれる。これらの土器群は概ね鎌倉時代後半段階の資料と考えられる。

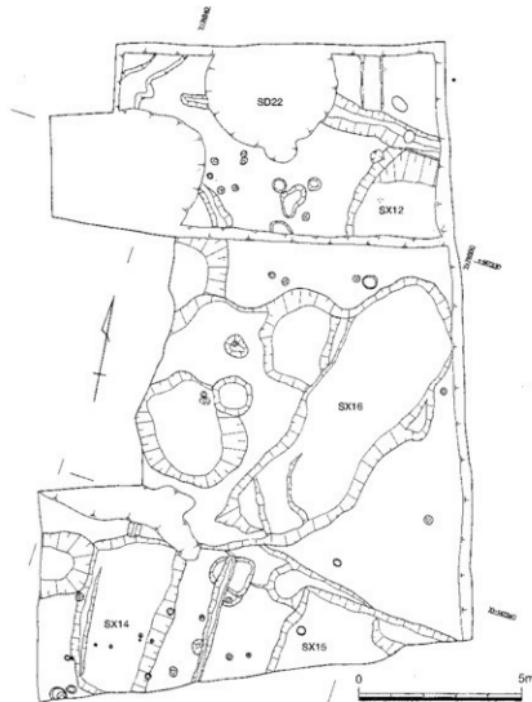


fig. 644 遺構平面図

S X16 落ち込み（S X16）は、調査区のほぼ中央部で検出されたが、長さ10m、幅3m、深さ40~50cmの長方形部と、それに付属するよう西側に拡がる浅い落ち込みが同時に検出されている。この長方形部を中心にして、拳大~人頭大の石が多量に投棄されている状況が確認された。そして、この投棄された石を取り除くと北東側と西側と南側に人頭大の石を組み合わせた石垣が確認された。そして、この北東側と南側の石垣の間には枝を打ち払った丸太を数本組み合わせて杭で固定し、その東側には針葉樹の小枝を束ね藁状にした、一見すると護岸施設の一部のような施設が確認された。この遺構の性格については判然としないが、石垣の内部の埋土がヘドロ状になっていたため、この中には水を溜めるようになつており、この丸太部をオオバーフローした水が小枝を束ね藁状にした部分を通ることによって濾過の役目を果たしていたことも考えられる。また、便所のような施設であった可能性の現状では否定できず、今後の類例の増加を待ちたい。（fig. 647~648・649）

この遺構の埋土上からは、須恵器や土師器や備前焼の小片が出土しており時期的には、前述した落ち込み（S X12）とはほぼ同時期の遺構ではないかと考えられる。この2基の落ち込みは2基がセットとして機能していた遺構であったかもしれない。



fig. 645 II区南全景



fig. 646 SX12



fig. 647 SX16



fig. 648 SX16 完壇状況

第2遺構面

土坑2基、溝状遺構2条、ピット27個が検出されているが、第1遺構面の遺構が深いために本來あったであろう遺構が相当削平されていることが考えられる。

3. まとめ

今回の調査で、遺跡の範囲が北側に拡がることが確認された。遺跡推定範囲の北端部より北側にも遺構が相当集中して検出されることは、この遺構が更に北側へ拡がる可能性を示唆するものとも言えるが、この北側には現在では比高差2m程度の崖面があり、地形的には沖積地から丘陵上へと立地条件が変化しており、遺跡の拡がりについては現状では明らかにすることはできなかった。

今回検出された遺構は鎌倉時代から室町時代前半段階のものが主体であり、遺物も比較的まとまって出土している。この調査地の西側には鎌倉時代創建と伝えられる長福寺があり、直接的に寺院との関連を窺い知るような資料はみられないが、池状の遺構が検出されることなどからも否定できないものと考えられる。今後このような遺構については、類例の増加を待って再度検討を加えたい。



fig. 649 SX16 遺構平面図

えびすちよう 9. 戍町遺跡 第15次調査

1. はじめに

戸町遺跡は、妙法寺川が形成した扇状地の末端部に拡がる縄文時代晩期から中世に至る複合遺跡である。特に弥生時代から古墳時代にかけて、豊富な遺構と遺物の検出がみられる。今回の調査は、山陽電鉄ビル建設設計画に伴い実施した。第14次調査地点（板宿駅前立体改良工事予定地）、第19次・第23次調査地点（都市計画道路山下線）に隣接する調査区である。今回は第15次調査の成果を中心に、合わせてこれらの調査の概要を報告する。

2. 調査の概要

調査対象範囲の遺構面数は9面である。各遺構面の時期は、第1・2遺構面は平安時代後期から鎌倉時代前期、第3遺構面は古墳時代後期から奈良時代前半、第4遺構面は弥生時代後期から古墳時代前期、第5遺構面は弥生時代後期後半、第6・7遺構面は弥生時代中期、第8遺構面は弥生時代前期、第9遺構面は縄文時代晩期から弥生時代前期である。



fig. 650
調査地位図
1:2,500

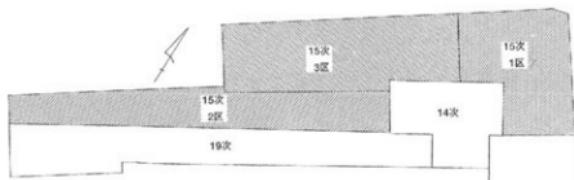


fig. 651
調査地位面図

- 第1遺構面** 平安時代後期から鎌倉時代前半の遺構面である。掘立柱建物群、井戸、土坑、溝、流路等が検出された。
- 掘立柱建物** 遺構の検出密度が高く、建物の規模や棟数を明らかにし難いが、棟方向を同じくする規格性をもった建物群が確認された。棟方向は南北方向ではなく約45度西に振っており、現在の区画方向にはほぼ一致している。溝と流路が建物の方向に一致している事や、井戸が建物の南側に設置されている事などから、規格性のある土地利用を行っていた事が窺える。
- 取水施設** 井戸は9基検出され、その種類は素掘り、石組み、丸太くり抜きの3種がある。井戸などの遺構が並んで設置された理由は、扇状地の湧水地点に当たるためか、土地利用上の区画のためであるか不明である。擬法珠形に加工した棒材（第19次調査 S E 102）、疫病に関する呪符木簡（第23次 S E 105）、小豆と宋銭を用いた祭祀遺構（第23次 S X 101）など、取水施設に対して行った祭祀が確認され、当時の水に対する精神生活の一端を示す資料を得た。
- 第2遺構面** 平安時代後期から鎌倉時代前半の遺構面である。柱穴、溝等の遺構が検出されたが、遺構の密度は希薄である。第1遺構面の柱穴と重複するものも存在し、大きな時期差はないと考えられる。
- 第3遺構面** 古墳時代後期から奈良時代の遺構面である。
- 水田** 北西から南東に延びる約13mの畔が2条、北東から南西方向に延びる約50mの畦が1条検出された（第14次・第15次1.3区）。調査区一面に偶蹄目の足跡が検出され、牛耕の様子が窺える。
- 第4遺構面** 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構面である。土坑、柱穴等が検出されているが、遺構の密度は希薄である。
- 第5遺構面** 弥生時代後期後半から末の遺構の遺構面である。遺構の密度は非常に高い。しかし、大半が不整形なプランまたは重複して検出されており、性格を判別しがたい遺構が多い。しかし、遺構密度の高さは、当該期の継続的な生活活動を示している。
- 掘立柱建物** 3×2間の掘立柱建物である（第15次1区）。建物の方向はほぼ東西方向である。



fig. 652 第1遺構面 全景



fig. 653 第2遺構面 全景

流 路 躍著な遺構としては、完形の遺物を多量に出土した幅35m、深さ3.5 mの流路（第15次・第19次 S R 501）がある。

第6 遺構面 弥生時代中期の遺構面で、遺構は調査区の中央部（第15次3区・第19次南東部）に集中し、掘立柱建物、柱穴、土器を多く含む土坑（第15次 S K 601, 602）、流路が検出された。

掘立柱建物 建物として繋まるものは少ないが、2間×3間（第19次 S B 601）、2間×5間以上（第15次）の建物が確認された。他にも同方向に並ぶ柱列があり、更に数棟存在すると考えられる。

流 路 幅6.5m、深さ80cm程度の蛇行する流路（第14・15次1区 S D 603・第19次 S R 60）が検出された。遺物は少量出土したのみである。

第7 遺構面 弥生時代中期の遺構面である。掘立柱建物や土坑が検出された（第19次）。第7 遺構面と大差無い時期の遺構面と考えられる。

第8 遺構面 弥生時代前期後半の遺構面である。サヌカイト製品が多量に出土した堅穴住居1棟（第19次）、木棺墓2基（第15次・第19次）を含む土坑墓3基、溝状遺構、土坑、ピット等が検出された。



fig. 654 第5遺構面 全景



fig. 655 第5遺構面 遺構検出状況



fig. 656 第6遺構面 全景



fig. 657 第6遺構面 SK601・602

溝 S D 901 幅10~30cm程度の溝状遺構が3条と幅2m程度の溝状遺構が検出された。

幅2mの南北に流れる流路である。埋土より多量の遺物が出土した。石器等の石器や剥片の出土量が多い。これまでの調査成果から、居住域と墓域を画する溝である可能性がある。

S D 902 3条共に幅10~30cm程度の規模である。それぞれ直交して検出されたが、用途は不明で
～904 ある。埋土からは多量の遺物が出土した。

木棺墓 溝の西側で土坑墓が2基検出された（第15次）。

S T 801 幅67cm、長さ170cm、深さ35cmの土坑墓と考えられる。墓穴が2段に落ち込むが、木棺の痕跡は遺存しない。骨、遺物等の出土はない。

S T 802 幅90cm、長さ160cm、深さ20cmの掘形を持つ。墓坑2段に落ち込み、幅90cm、長さ160cmの木棺の痕跡が確認できた。骨は残存していないが、白色に変色した土壤の観察から、埋葬状況は復原できる。仰臥屈膝の姿勢で、頭位は東である。遺物は出土しなかった。

土 坑 溝の東側に1基、西側に11基検出された（第15次）。これらの遺構の中には、埋葬施設として使われたものも含まれている可能性がある。しかし、遺物を含む遺構が多く、埋葬施設と確認された遺構との様相が異なっているため、土坑として取り扱う。

炭化米 調査区西端部の遺構面から、炭化米がまとまって出土した。付近の遺構からも若干出土したが、大半は遺構面の直上で検出された。遺構との関連は不明である。

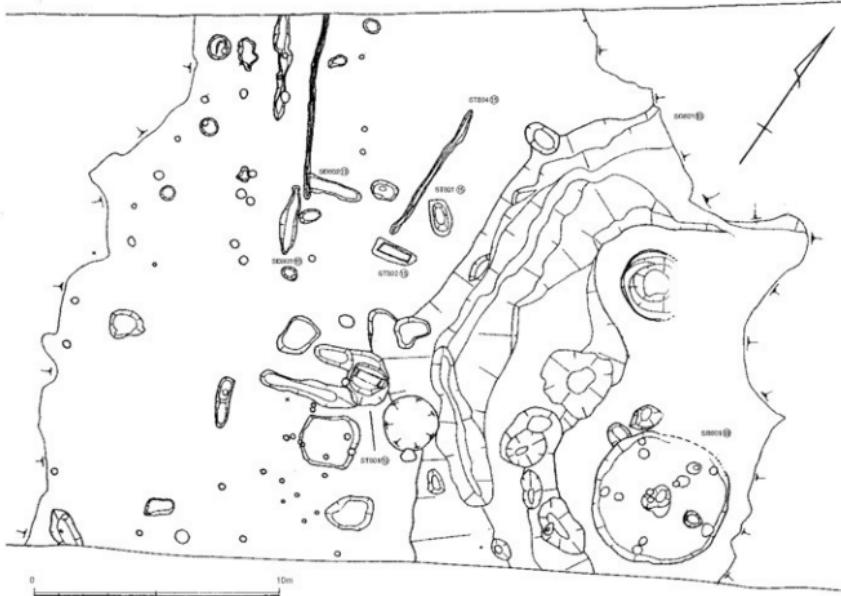


fig. 658 第8遺構面 平面図（丸数字は調査次数を示す）

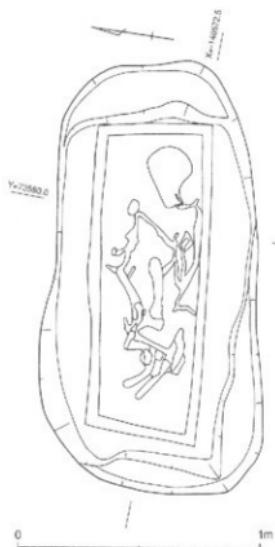


fig. 659 木棺墓 ST802 平面図



fig. 660 木棺墓 ST802 周辺



fig. 661 木棺墓 ST802

第9遺構面 繩文時代晩期から弥生時代前期の遺構面である。自然流路と北東へ落ちる落ち込み(第14・15次3区)が検出された。自然流路は、強い流れの中で堆積したと考えられる砂礫層の堆積が見られる。遺物量は少ない。

3.まとめ

1区は洪水層及び流路の影響を受け、第1面及び第5面を除いて遺構の分布は希薄である。地形的にも、西側の調査区と比較すると標高は低く、洪水、氾濫等の影響を受けやすい不安定な状況であったと考えられる。2・3区は安定した土壤の堆積が見られ、遺構の密度、遺物量共に多い。特に中世、弥生時代後期から古墳時代初頭、弥生時代中期、弥生時代前期の4時期の遺構密度は高い。今回の調査の主な成果は下記のとおりである。

- ①当遺跡において12~13世紀の集落域が初めて確認され、これまで考えられていた遺跡範囲のさらに北側へ広がると考えられる。
- ②第1次調査地点で検出された弥生時代前期後半の水田と同時期の居住域、墓域が検出された。これにより、当地区で水田耕作が始まった時期の、居住域・生産域・墓域の土地利用状況を復原する資料を得た。
- ③S T 902で検出された人骨の痕跡は、弥生時代前期の埋葬姿勢が判る資料で、当時期の畿内の資料は数少ない。当該期の葬送方法の変化を考える上での良好な資料となる。



Fig. 662 第1造構面 平面図（丸数字は調査次数を示す）

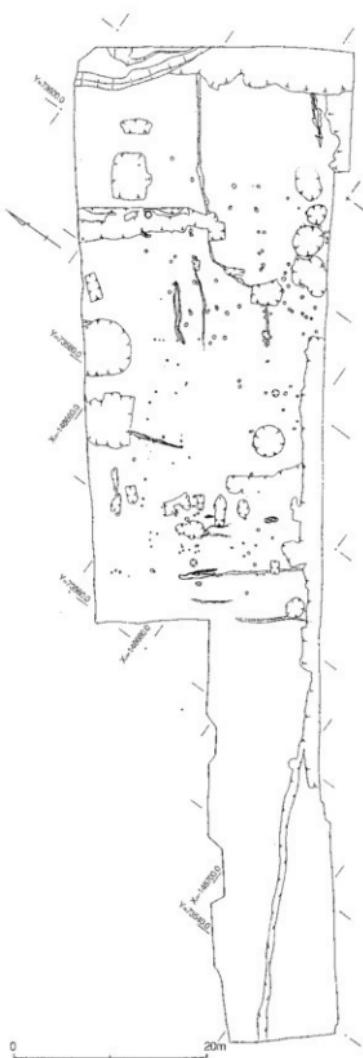


Fig. 663 第2造構面 平面図

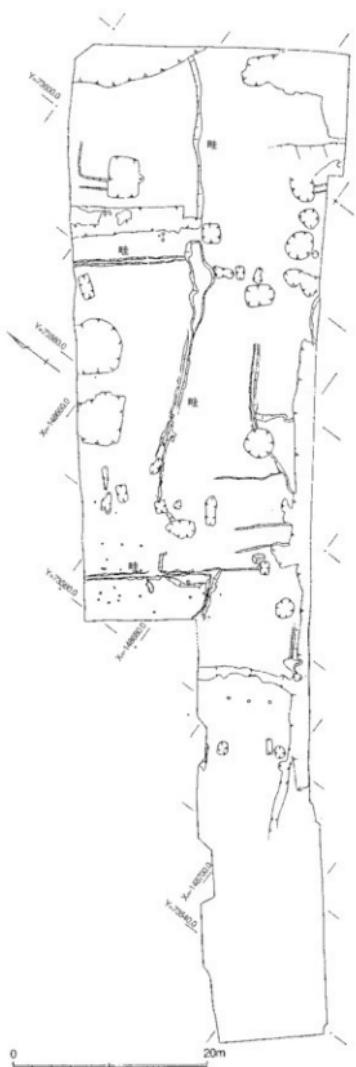


Fig. 664 第3遺構面 平面図



Fig. 665 第5遺構面 平面図（丸数字は調査次数を示す）

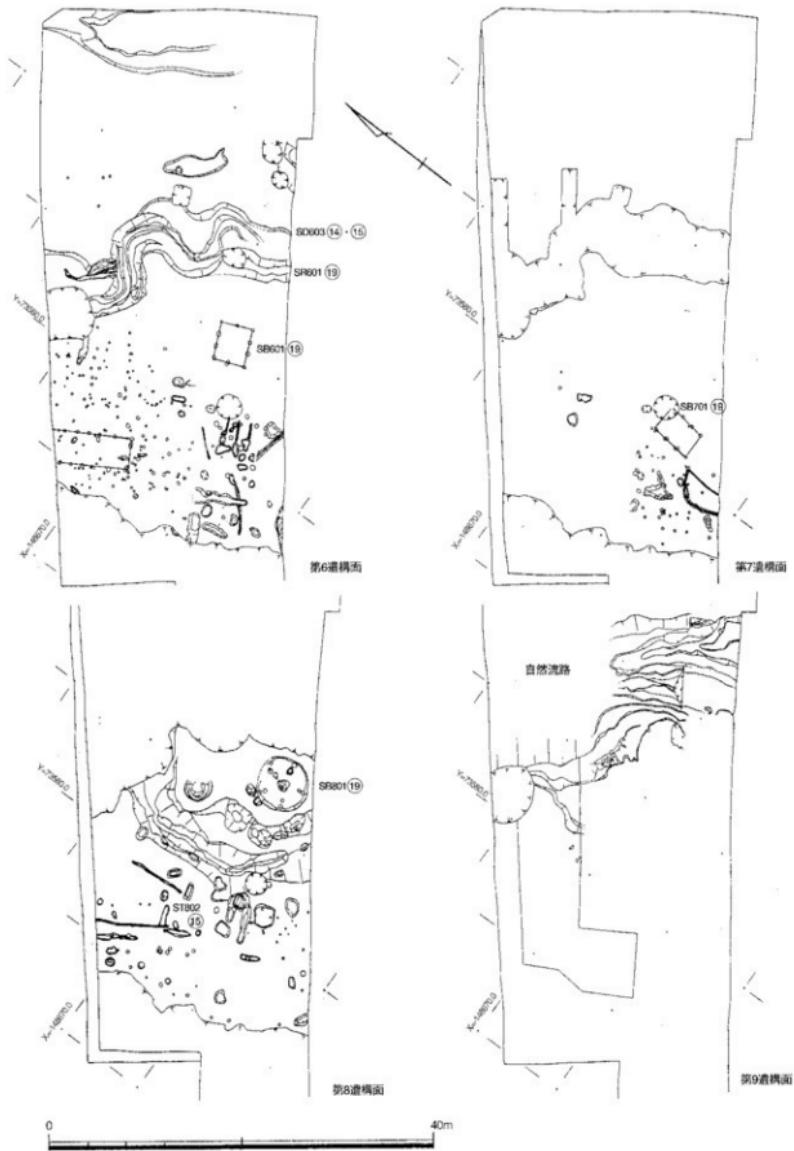


fig. 606 第6～9遺構面 平面図（丸数字は調査次数を示す）

10. 戸町遺跡 第23次調査

1. はじめに

戸町遺跡は、20数次に及ぶ調査によって、繩文時代晩期から中世に至る複合遺跡であることが判明している。今回の調査対称地は都市計画道路暫定山下線の街路築造工事に伴い実施したもので、平成7年度に実施した第19次調査の継続事業である。これまでに実施した隣接する調査区（第7・14・15・19）と合わせると、合計約3,000m²の範囲に及ぶ。



fig. 667
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要 12~13世紀の遺構面である。井戸2基、用途不明遺構1基、溝1条、柱穴数基が検出された。



fig. 668 第1遺構面 SE105

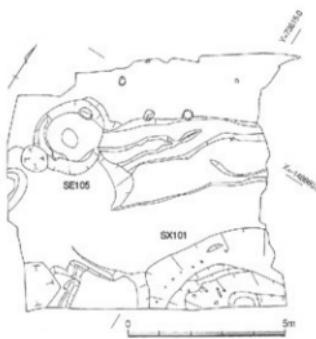


fig. 669 第1遺構面 平面図



fig. 670 SX01 棚出状況



fig. 671 SX101 遺物出土状況

第1遺構面検出状況

S X101 南東方向に落ち込む遺構で、護岸のためと考えられる杭が、弧状に打ち込まれている。埋土より10点以上の土師器小皿と宋線が10枚検出された。何らかの祭祀が行われていたと考えられる。

S E105 長径280cm、短径230cm、深さ140cmの不定円形の掘形を持つ井戸である。井戸側等の部材は確認されなかった。遺物出土量は少ないが、呪符木筒1点、木鍤1点が検出された。井戸は大きく2層に分層され、木製品が検出されたのは、下層である。

呪符木筒 幅5.2cm、残存長26.2cm、厚さ6mmの木筒で、上部の両側を切欠いている。呪符は両面に記されており、「咄咲天」「牛頭天王」「八王子」「神」等の文字が判読できる。「牛頭天王」「八王子」は、祇園信仰では神格化されており、疫病の神とその息子とされている。のことから、当木筒は疫病に対して行った祭祀に使用されたものと考えられる。

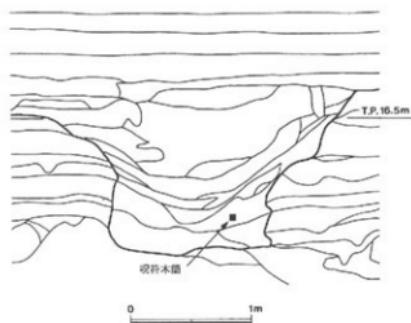


fig. 672 SE105 土壟断面図



fig. 673 SE105 出土 呪符木筒実測図

隣接した調査区（第14次調査）で、同時期の掘立柱建物数等と井戸が検出されており、集落内における井戸廃棄時の祭祀の1例を示す資料である。

第2遺構面 中世の遺構面である。溝が1条と、調査区全面で偶蹄日の足跡が検出された。耕作面であると考えられる。

第3遺構面 古墳時代後期の遺構面である。西側に傾斜する地形で、顕著な遺構はない。

第4遺構面 弥生時代後期の用途不明遺構、土坑、ピットが検出された。

第5遺構面 弥生時代中期から後期の溝1条とピットが数基検出された。遺物量は少ない。

S D 501 幅2m、深さ30cm程度の流路である。調査区南端で西側に曲がる。用途は不明である。

第6遺構面 遺物は僅少であるが、弥生時代中期の遺構面と考えられる。自然流路が2条検出された。顕著な遺構はない。

3.まとめ 特記される遺構は、第1遺構面で検出されたS E 105とS X 101が挙げられる。これまでの調査で、井戸や取水に関する遺構が東西方向に並んでいることと、これらの遺構の北側に隣接して建物が存在することが明らかになった。建物と取水施設の関連や、推移、建



fig. 674 第2遺構面 平面図

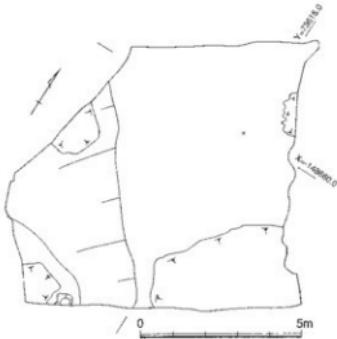


fig. 675 第3遺構面 平面図



fig. 676 第4遺構面 平面図

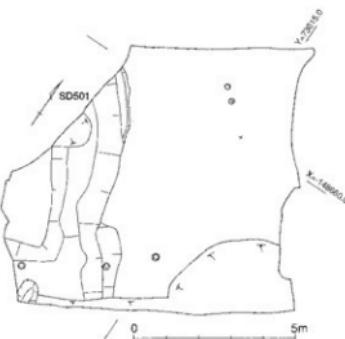


fig. 677 第5遺構面 平面図

物と祭祀の関連など、今後の整理作業の中で明らかにできると考えられる。

今回の調査区は、第14・15・19次地区と比較すると標高が低く、土層観察からも河川の洪水や氾濫の影響を受けやすい不安定な状況にあったと考えられる。そのため、遺構、遺物共に少なく、当調査区の東側に遺構の広がる可能性は低いと考えられる。



fig. 678 調査地遠景（航空写真）

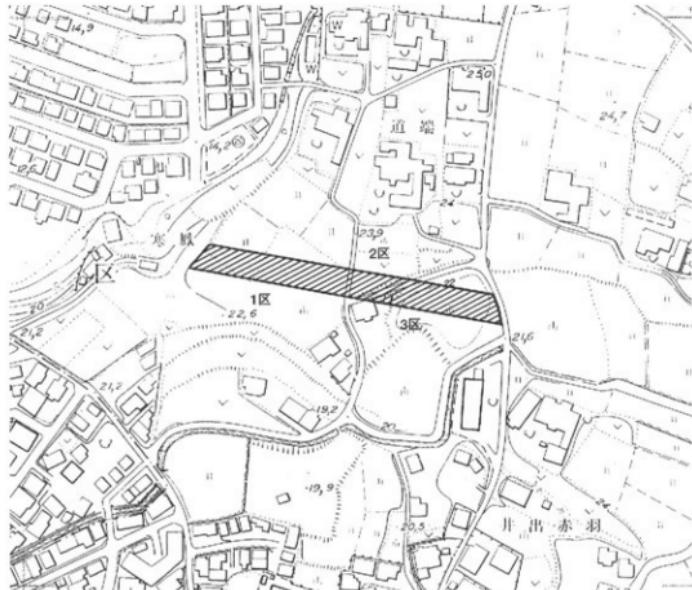
かんぷう 11. 寒風遺跡 第2次調査

1. はじめに

明石川の支流、伊川と明石川の合流点周辺には、弥生時代から古墳時代にかけて、新方遺跡、白水遺跡、吉田南遺跡、潤和遺跡といった集落遺跡が多く知られている。また、合流点から伊川を2~3km遡った丘陵上には、高津橋大塚古墳、天王山古墳群といった古墳が点在している。

寒風遺跡は、西区伊川谷町潤和字寒風に所在する。平成7年度の発掘調査で確認された遺跡で、平安時代後期の掘立柱建物が6棟確認された他、当時の瓦も出土し、旧山陽道との関連において、注目されている。また、古墳時代後期の掘立柱建物等の遺構や遺物も出土しており、周辺に同時期の集落が存在する事が示唆された。

平成8年、当地に道路建設事業が計画され、工事影響部分の約2,400m²について発掘調査を実施する事となった。調査地は眼下に伊川を見下ろす標高22~23mの河岸段丘西辺に位置し、調査区の西半は段丘上の平坦地であるが、東半は谷へと下る傾斜地となっている。調査は、西からI・II・IIIの3地区に分割して行った。



2. 調査の概要

基本層序は、上から現代耕作土（厚さ20cm）・現代床土（厚さ5cm）・黄灰色細砂（近世耕作土／厚さ10cm）・灰褐色細砂質シルト（=古墳時代後期包含層／厚さ0~45cm）・灰黄色粘土（=遺構面）となる。灰黄色粘土上面では、古墳時代後期の遺構が検出された。



Fig. 680 I区 遺構平面図

掘立柱建物 I区では掘立柱建物が16棟検出された。いずれの建物も柱穴埋土上の遺物が僅少であり、時期の詳細は明らかではないが、竪穴住居との切り合い関係から、6世紀代のものと考えられる。柱穴は総柱のものと側柱のみのものがあり、堀り形はSB06, 07が方形である他は全てが円形、もしくは円形に近い不定型である。

SB07 方形掘形の柱穴を持つ側柱のみの掘立柱建物である。北辺の中央の柱穴は20cm程外側に位置しており、棟持柱であると思われ、切妻屋根であったと考えられる。

SB10 東西3間×南北4間の総柱建物である。柱穴の直径は35~95cmと、大小のばらつきが大きく、側柱のものの方が東柱のものよりも大きい傾向がある。柱間は東西、南北共に1.6mを測る。床面積が31.2m²と、今回検出された掘立柱建物中最大のものである。

遺構名	規模 東西×南北(m)	平面形	出土状況	東柱	主軸方位	時期
SB01	2間(3.4)×2間(3.2)	40~70cm	18cm	有	N25.5°W	6C
SB02	2間(3.2) 2間(3.9)	40~50cm	?	?	N29°W	6C
SB04	3間(4.5) 3間(4.2)	25~35cm	?	有	N15°W	6C
SB05	2間(3.8) 2間(3.8)	40~45cm	12~15cm	有	N16°W	6C
SB06	3間(4.8) 2間~(3.6~)	45~70cm	?	有	N19.5°W	6C
SB07	4間(4.7) 3間(4.9)	50~70cm	?	無	N21.5°W	6C
SB09	3間(3.5) 2間(3.2)	40~50cm	16~20cm	有	N28.5°W	6C
SB10	3間(5.2) 4間(6.0)	35~95cm	25~35cm	有	N31°W	6C
SB13	2間(3.1) 3間(4.4)	30~50cm	?	有	N34.5°W	6C
SB23	3間(4.6) 3間(4.6)	35~60cm	?	無	N5°W	6C
SB24	3間(4.3) 3間(3.4)	40~65cm	?	有	N19°W	6C
SB25	3間(4.5) 3間(3.8)	50~60cm	?	無	N22°W	6C中頃
SB26	1間~(1.5~) 1間~(1.3~)	50cm	?	?	N30°W	6C
SB27	1間(2.8) 3間(5.2)	40~50cm	?	—	N13.5°W	6C
SB30	2間~(3.3~) 3間~(6.0~)	55~70cm	16cm	無	N25°W	6C中頃
SB39	2間(3.7) 3間~(4.6~)	55~80cm	?	無	N26°W	6C中頃

表1 I区検出 掘立柱建物一覧

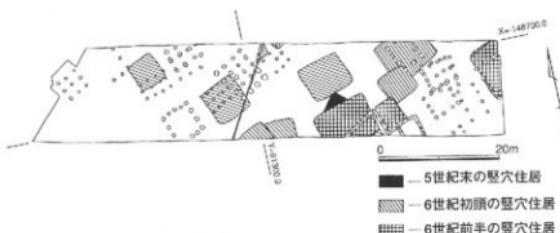


fig. 681 I区 坪穴住居時期別分布模式図

坪穴住居

I区では坪穴住居が15棟検出された。出土遺物、切り合ひ関係から、5世紀末・5世紀末～6世紀初頭・6世紀初頭・6世紀前半と、4段階の時期差があるようである。

S B15 北壁に主軸長1.15m、幅84cm、残存高11.6cmの竈を持つ。竈内部からは土師器壺が2個体、入れ子になった状態で出土した。これは、支脚台として再利用されていた壺が破損した中に、煮沸具として使用されていた壺が落ち込んだものと考えられる。

S B18 北壁と西壁に2基の竈を持つ。北壁の竈1は主軸長120cm、幅125cm、残存高11cmで、竈内には水平方向に半分に割った土師器壺の上半部を正位に据えており、支脚台として再利用してたものと思われる。西壁の竈2は、主軸長70cm、幅100cmを測る。

S B21 北壁のほぼ中央部に、主軸長95cm、幅1m、残存高9cmを測る竈を持つ。袖の内面は熱を受けて赤変している。天井は削平によって遺存していないが、竈内には、土師器の高杯が天地を逆にした状態で据えられており、支脚台としての使用が考えられる。

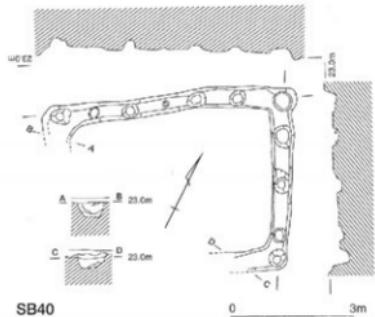
遺構名	規模 東西×南北	深さ	柱穴間距離	柱穴径	竈	主軸方位	時期
S B03	4.8m×5.8m	5~14cm	—	—	無	N-21°-W	5C末~6C初
S B08	6.2m×6.2m	0~16cm	3.2m	12~15cm	無	N-26°-W	5C末~6C初
S B11	1.3m~×0.8m~	9~11cm	—	—	?	N-18°-W	5C末~6C初
S B12	2.1m~×0.8m~	15~18cm	—	—	?	N-29°-W	5C末~6C初
S B14	4.8m~×1.2m~	1~6cm	—	40cm	?	N-25°-W	6C初
S B15	5.6m~×4.5m~	0~8cm	—	—	1	N-1.5°-W	5C末~6C初
S B16	7.3m×6.5m	3~10cm	3.4m	60~65cm	?	N-19°-W	6C初
S B17	5.0×4.8	12~37cm	—	—	無	N-41.5°-W	5C末
S B18	9.1×6.9	14~23cm	5.6×3.7m	60~80cm	2	N-15°-W	6C前半
S B19	0.5~×0.7~	8~9cm	—	—	?	?	6C初
S B20	3.7~×5.0	4~12cm	1.9	30~40cm	?	N-25.5°-W	6C前半
S B21	5.0×5.0	1~11cm	2.8	40~50cm	1	N-23°-W	6C初
S B22	7.7×8.4	2~21cm	—	—	?	N-26.5°-W	5C末~6C初
S B28	5.6~×6.9	15~24cm	3.3	80~100cm	?	N-24°-W	6C前半
S B29	5.5~×9.0	1~5cm	—	—	?	N-18°-W	6C前半

表2 I区検出坪穴住居一覧

大壁造り建物 今回の調査では大壁造り建物が2棟検出された。いずれも他の建物群とおよその主軸方向を描えて建てられている。また、建物内には時期の併行する柱穴は検出されておらず、土壁のみによって屋根を支えていたものと思われる。

SB40 SB18,20を切る形で検出された。南北方向の主軸方位はN28°Wである。東西7m、南北4.9m、幅50~60cm、検出面からの深さ20~34cmの布掘りの溝が長方形に巡っており、その中に柱穴が掘られている。建物の規模は、東西6間×南北4間であり、柱穴掘形の直径は18~60cm、溝の底からの深さは5~25cm、柱間は東西0.9~1.1mであるが、南北は60~75cmと1.4mの2通りがある。南北の柱間は、4間ある内、外側が狭く内側が広い。また、東西辺の中央にあたる柱穴のみが他のものより極端に小さく、ここに入口があったのではないかと推測される。溝内の出土土器から6世紀中頃に位置づけられる。

SB41 SB20を切る形で検出された。南北方向の主軸方位はN15°Wである。東西3.9m、南北4m、幅50cm、検出面からの深さ8~30cmの布掘りの溝がほぼ正方形に巡っており、その中に柱穴が掘られている。建物の規模は、東西3間×南北3間で、柱穴掘形の直径は50~55cm、溝の底からの深さは18~30cm、柱間は東西が1m、南北が0.8~1.2mを測る。南北の柱間は、SB40と異なり、3間の内の中央が狭く、外側が広い。また溝の南辺は、調査区の壁に接しているため詳細は不明であるが、深さ8cmと浅く、入口が南辺にあった可能性が考えられる。溝埋土よりの出土土器の型式から6世紀中頃に位置づけられる。



SB40



fig. 682 大壁造り建物 平面図・断面図

fig. 683 大壁造り建物 (手前からSB40・41)

- 溝** 古墳時代後期の溝が17条検出された。
- S D08・10・11** コの字状を呈していることと、主軸線の方位が他の竪穴住居とはほぼ一致するため、竪穴住居である可能性も考えられる溝で、出土土器より6世紀前半に位置づけられる。
- S D17** 幅60~90cm、深さ25~50cmを測る。埋土の状況には、水の溜まっていた形跡が無く、掘削された時点から短期の間に埋められたと推測される。また、埋土には土器や礫が大量に混入しており、中には製塙土器片も多く見られる。出土土器は6世紀初頭~中頃のものが同一埋土に混入しており、埋没時期は6世紀中頃と考えられる。
- 土 坑** 古墳時代後期の土坑が8基検出された。
- S K01** 長径1.5m、短径90cm、深さ約30cmの楕円形を呈する。長軸は南北方向よりやや西を向いており、埋土の下層からは、6世紀初頭の須恵器杯の杯身と蓋が1セット出土した。また、北半部からは、製塙土器が多量に出土した。製塙土器は全てが破片であり、煎熬の後、塩を取り出すために破砕され、一括投棄されたものと考えられる。
- S K05・06・08** S K05は長径1.1m、短径60cm、深さ2~15cm、S K06は長径1.4m、短径80cm、深さ6~10cm、S K08は長径1.5m、短径1.1m、深さ1~5cmを測る。これらの土坑はどれも浅く、底面に直径約10cm大の凹みが多く見られるのが共通する特徴である。用途は判然としないが、動物を飼育していた場所や、大型造り建物を建てる際に壁土を捏ねた場所等ではないかと思われる。出土土器が少なく時期は特定できないが、6世紀代の遺構と考えられる。
- S K07** 東西約2m、南北1.5m以上、深さ約55cmを測る、方形プランの土坑であり、土器が多く出土している。下層は黒褐色粘土で、腐食した有機物が堆積する。一方上層は、地山ブロックが混入しており、一度埋没した土坑を再び拡張して掘削し、使用しなくなった土器と一緒に埋め戻した状況が考えられる。出土土器より6世紀前半に位置づけられる。



fig. 684 I区 全景(東から)



fig. 685 I区 全景(西から)



fig. 686 II区遺構平面図

II 区 基本層序は、上から、現代の耕作土(20cm)・床土(5cm)・褐色及び灰黄色シルト交じり基本層序 砂層(=遺構面/地山)となる。

竪穴住居 東西4.5m以上、南北4.0m以上の方形の竪穴住居であり、南北方向の主軸方位は、N33°

S B33 Wである。後世の削平が著しく、南半分が遺存していなかった。幅約15cmの周壁溝が巡る。また、竪を東辺に1基を持つ。出土土器より6世紀前半に位置づけられる。

S B34 東西3.0m以上、南北3.0m以上の方形の竪穴住居であり、南北方向の主軸はN30° Wである。西辺には幅約15cmの周壁溝が検出された。6世紀前半に位置づけられる。

竪状遺構 調査区の北西隅、東方へと下る緩斜面で検出された遺構で、竪状を呈する。長軸の長さ

S X02 約1.4m、幅約1.0m、残存高4~20cmを測る。袖は、内面は熱を受けて赤変している。おそらく後世の削平によって、竪穴住居の埋土が切り取られ、竪のみが遺存していたものと思われる。出土土器より6世紀前半に位置づけられる。

掘立柱建物 II区では古墳時代後期の掘立柱建物が2棟検出された。以下の表のとおりである。

遺構名	規 模 東西×南北 (m)	柱穴径 (cm)	柱痕径	東 柱	主軸方位	時期
S B31	1間~(2.2~)×2間(3.3~)	20~65	?	有	N34°W	6C
S B32	2間~(3.5~)×5間(6.4~)	35~65	?	無	N41°W	6C



fig. 687 II区 全景



fig. 688 III区 掘立柱建物・柵

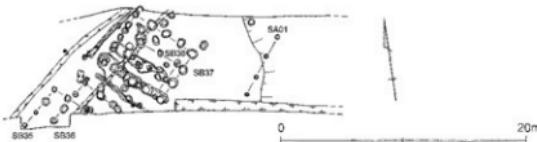


fig. 669 II区遺構平面図

III 区 基本層序は、上から、現代の盛土（1.8m）・近世以降の水田耕土（20cm）・近世以降の盛土（50cm）・灰色粘土質シルト、灰オリーブ色極細砂（＝古墳時代及び平安時代の遺物包含層／0~30cm）・浅黄色細砂混じり粘土（＝遺構面）となる。また、調査区の西端部分は、後世の削平を受けて基盤層が削り取られており、遺構は検出できなかった。

掘立柱建物 III区では、4棟の掘立柱建物が検出された。規模、構造等は下記の表のとおりである。

S B37 東西3間×南北3間+1間の側柱のみの建物であり、S B38に切られる形で検出された。特徴は、3間×3間の建物の北辺に平行に、1列の柱列が作ることで、庇が存在したことが推測される。また建物の西側と柱列の北側に、雨落ち溝と思われる幅約30cm、深さ約6~15cmの溝（S D19, 20）が伴う。また、南辺の東から2本目の柱穴の底には、縦13cm、横8cm、高さ5cm程の平らな礫が敷かれ、その周りにも直径約5~10cmの礫が平らに敷き詰められている。その西隣の柱穴の底にも直径3~13cmの礫が10個以上入れられていた。他の柱穴にはこの様な根石は見られなかつたが、これは、2基の柱穴の位置では、他の柱穴の基礎層の下層に見られる砂礫層が存在しないため、基礎の強化のために根石を入れる必要があったと思われる。柱穴の直径は、建物の本体部分では80~100cm、庇部分で45~60cmと、その大きさに違いが見られる。柱穴出土の土器より6世紀に位置づけられる。

SB	規 模 東西×南北 (m)		柱穴間距離 (m)		柱穴径 (cm)	束 柱	構 造	主軸方位	時 期
	東西	南北	東西	南北					
35	3間~(3.9~)	3間~(3.2~)	1.2~1.4	1.4~1.6	30~60	無	側柱	N41.5°W	6C
36	2間~(4.0~)	2間~(3.6~)	1.3~1.4	1.6~1.8	40~75	無	側柱	N42°W	6C
37	3間(4.6)	3+1間~(5.7)	1.5	1.3~1.5	45~100	無	側柱	N45°W	6C
38	2間(3.3)	3間(5.0)	1.6	1.6	40~70	有	縦柱	N46°W	6C

柵列 S A01 東西3間（5.4m）以上の柱列が、東西方向に並ぶ。柱穴の直径は約20cmで、柱間は1.6~1.9mを測る。この柱列より南東からは遺構は検出されなかつたため、堀等、何らかの区画の意味を持つものと考えられる。出土土器が僅少であるため、時期の特定は難しいが、6世紀に属する遺構であると考えられる。

遺 物 今回の調査では縄文時代、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代後期の遺物が28点入りコンテナで約100箱出土した。縄文時代の遺物では石器、弥生時代は土器、磨斧、古墳時代は土師器、須恵器、土鍬、白玉、平安時代は須恵器、瓦等の遺物がある。ただし、これら多種にわたる遺物の中でも、中心となるのは古墳時代後期の土器で、これらは5世紀末~6世紀中頃、陶邑編年式TK23型式~TK43型式に当たる。

3.まとめ

今回の調査では、第1次調査で検出された平安時代の遺構は検出されなかったが、古墳時代後期の遺構が多く検出され、集落の様相を検討する上で多くの成果があった。

I区のSB18、25は長辺が約9mもある大型の堅穴住居で、この時期においてこれだけの規模を持つものは県内では検出されておらず、集落の性格を検討する上で重要である。

大壁造り建物は、平成9年3月現在、滋賀県大津市の穴太遺跡の15例をはじめとして滋賀県内を中心に、奈良県、大阪府において、計35棟の検出例が知られているが、兵庫県内では初めての発見となった。明確な物証として、韓式系土器等の出土は未確認であるが、穴太遺跡と、その周辺の横穴式石室を持つ古墳との関係からも言及されるように、渡来系氏族との関連が深いものであると考えられる。

I区のSK01からは多量の製塙土器が出土した。今回出土した製塙土器は、口径が4~6cm、器厚が2~4mmと小型で、表面を指ナデ、内面を板ナデで調整するもので占められる。これは古墳時代後期の播磨地方の製塙土器に見られる特徴である。落ち込み1からは土鍊が約20点出土しており、漁撈が行われていた可能性が考えられる。

I~III区にわたって検出された掘立柱建物群には、純柱のものと側柱のみのものの2通りが存在し、純柱のものは倉庫、そうでないものは平地式の住居であったと考えられる。これら掘立柱建物は出土遺物が少なく、正確な時期を割り出すことは難しいが、切り合い関係等から、堅穴住居よりは新しいものが多いと考えられる。また、最も古いと考えられるSB17以外、大壁造り建物を含む全ての建物がほぼ同じ方向を向いて建てられており、当時としてはかなり計画的な集落形成が行われていたことが想像される。出土遺物や切り合い関係から、大まかに堅穴住居→掘立柱建物→大壁造り建物の順で建築されていったと推定されるが、各々の建物が併存していた時期があり、隨時建て替えが行われていたと考えられる。

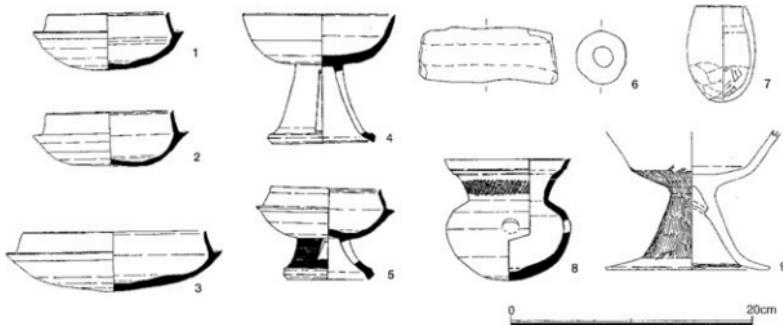


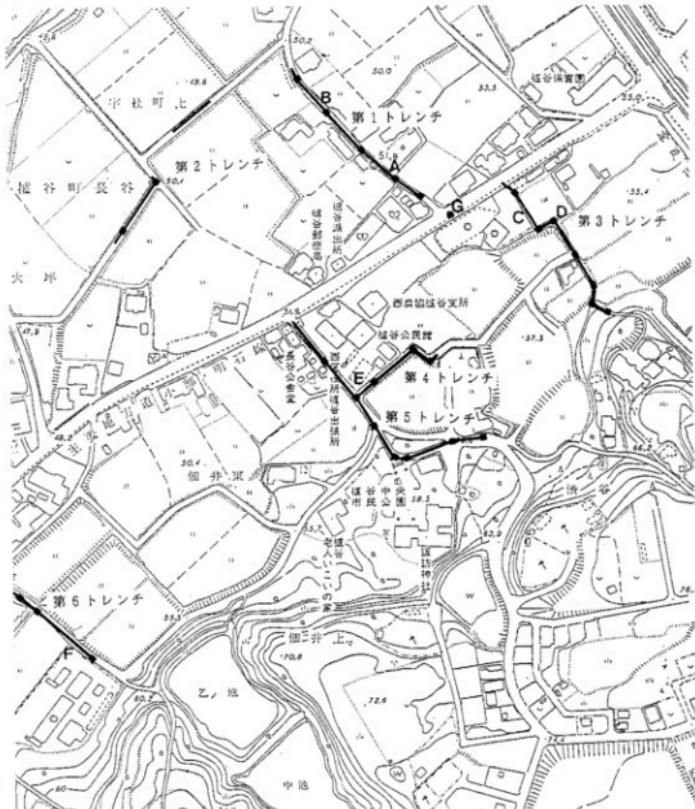
fig. 690 出土遺物実測図

(1:SB13 2・6:SB01 3:SB09 4:SK01 5:SX01 6:SD01 7:SB08)
(1~5・8:須恵器 9:土器 6:土鍊 7:製塙土器)

はせ 12. 長谷遺跡

1. はじめに

長谷遺跡は、明石川の支流である櫛谷川左岸の河岸段丘上に立地する鎌倉時代及び弥生時代の集落遺跡である。今回の調査は、汚水管布設工事に伴うもので、工事予定地内の11ヶ所で事前に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の存在が確認された範囲について発掘調査を実施した。



2. 調査の概要

調査地は地形から河岸段丘の端部、段丘上、南側の丘陵への傾斜変換点に大別することができる。遺構・遺物は段丘上、丘陵への傾斜変換点付近に集中して検出された。

調査の結果、第1、3、5、6トレンチで中世のピット、土坑を、第4トレンチでは中世と推定される炭のつまつた落ち込みを検出した。また、第1トレンチでは一部で弥生時代の遺物包含層を確認した。

段丘端部の調査地 河岸段丘の端部に位置する第2トレンチでは、大半が櫛谷川の氾濫原であり、段丘端部が一部で確認できたのみで遺構は確認されなかった。

段丘上の調査地 段丘上から櫛谷川へ緩やかに下る第1トレンチは、B地点付近において段丘が約2m程度下がっており、ここから中世のピット及び土坑が検出された。A地点では、ピット、落ち込み状の遺構を検出した。また、一部で弥生時代の遺物包含層を確認した。

丘陵～段丘上の調査地 丘陵から段丘への変換点に位置する第4トレンチでは、C地点で中世のものと考えられる炭の詰まった落ち込み1基、第6トレンチでは、中世の土坑3基とピットを検出した。

丘陵上の調査地 丘陵上に位置する第3トレンチは、C地点で中世のピット、溝、土坑が検出され、第6トレンチでは、中世の土坑3基とピットを検出した。

第3トレンチC地点と第1トレンチのA地点との間、県道部分の試掘調査（G地点）で完形の土師器が出土している。土師器は、一番下部の一枚を上向き（正位置）に置き、その上に口縁部を下に十数枚が重ねられた状態で出土した。試掘調査のため、最小限の確認に留めたため、全体の様相は明らかではないが、隣接して同様の重なりが数個体存在しており、地鎮等の祭祀に伴うものと推定される。

出土遺物 出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器が出土しているが、そのほとんどが小破片であった。図示（fig.692）した土師器は、試掘調査G地点のものである。

fig.692-1は小皿で口径は、7.0cm、器高は1.9cm、底部は糸切りで、内面の底部と体部の境は屈曲する。また、体部外面にはナデによる段がみられる。2～5は壺で、口径は8.8～10.4cm、器高2.6～3.0cm、底部は糸切りで体部が外方へ直線的に開くタイプ（2・3）と、体部にナデによる段がみられるがタイプ（4・5）がある。これら遺物は、12世紀代の時期が考えられる。

3.まとめ 今回の調査は限られた範囲であったが、中世の遺構・遺物が長谷地区の段丘上一帯に広がっていることが確認できた。また、第3トレンチでは、昭和63年度の調査で確認されていた弥生時代の遺物包含層がさらに東に広がることが判明した。

これまで、不明であった箇所で遺構・遺物の存在が確認できたことは大きな成果であった。今年度の調査は第6トレンチまで終了し、来年度に県道小部・明石線の部分の調査に着手する予定である。

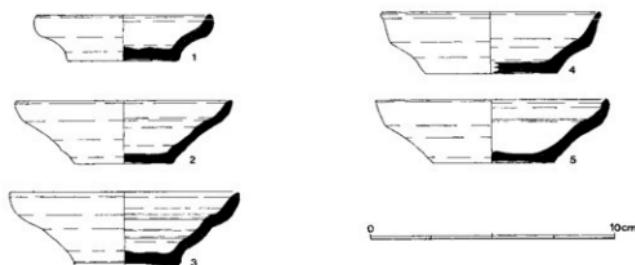


fig.692 G地点出土遺物実測図（土師器）

13. 柏木遺跡 第12次調査

1. はじめに

柏木遺跡は、神戸・明石市境を流れる明石川の支流、櫛谷川の中流域に位置する。川の両岸は未発達の河岸段丘と丘陵からなり、流域平野はごくわずかである。

当遺跡は過去の調査結果から、弥生時代～中世の集落遺跡であることが判っている。

今回の発掘調査は、昨年度に引き続き、主要地方道小部・明石線建設に伴うものである。



fig. 693
調査地位位置図
1:2,500

2. 調査の概要

調査地は、河岸段丘上に位置し、調査前まで水田として利用されていた。今回は、工事が予定されている幅約13m、長さ約30mの路線敷部分の調査を行い、弥生時代の土坑、ピット、江戸時代末～明治時代頃にかけての井戸群を検出した。

今回の調査地は、弥生時代の造構面は、河川の氾濫によって調査面積全体の約1/3が流失している。また、江戸時代以降に残りの部分が整地され、現況耕作土直下の黄褐色細砂～極細砂で造構が検出される。

弥生時代の遺構 土坑2基、ピット18基を確認した。

S K01 調査地の南端で検出された、 1.6×1 m、深さ20cmの楕円形の遺構で、埋土中に炭を多く含む。底面から逆離して、甕の上半分が裏返った状態で出土した。土器の年代は弥生時代中期である。

S K02 調査地の北壁付近で検出された。弥生時代中期の土器が出土している。

ピット 北半部には少なく、南半部でかなり集中して検出された。S P01で高壙の脚部が出土したほかは、土器の小破片が出土したのみである。なお、土坑、ピットの埋土は黒褐色砂質土である。

鎌倉時代の遺構 北半部では、鎌倉時代の土坑が1基確認された。これは、近世末～近代の井戸群に四隅を

S K03 掘り取られており、正確な形状、深さは確認できない。埋土から、須恵器、土師器の小皿が出土した。

江戸時代末～明治時代の遺構 また、北半部には東西方向に、黄灰色細砂～砂疊層が堆積しており、その近辺に集中して江戸時代末～明治時代頃にかけての19基の井戸群が検出された。いずれの井戸も深さが1m～1.3m前後であり、前記の細砂～砂疊層の堆積深度内で掘削を止めている。同層では、現在でも湧水が認められる。井戸群は、掘形が切り合っているものもあり、湧水量が少なくなると、砂脈を追って順次掘削したものと推定される。また、底に桶の底板や、籠（たが）りが残存するものがあり、掘形の形状からみても、桶を井戸枠に転用したもののが多かったと想定される。

3.まとめ

今回の調査では、弥生～明治時代の遺構・遺物が確認された。弥生時代の遺構は調査区全体に散在しているが、遺構の分布密度は疎である。平成3年度の谷口川の河川改修に伴う発掘調査（今回の調査区から北東約100m付近）では、弥生時代中期の遺構、遺物が確認されており、この周辺には当該時期の遺跡が存在し、今回の調査区はその縁辺部にあたるようである。

また、北半部には江戸時代末～明治時代頃にかけての井戸群が検出され、当該時期の層敷が存在したと考えられる。

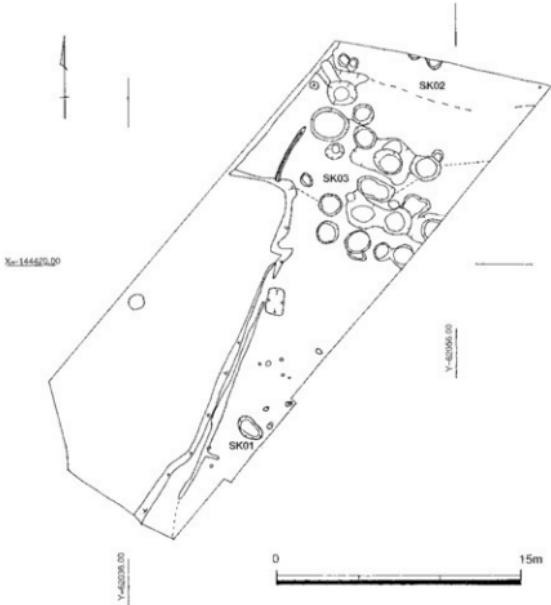


fig. 694 遺構平面図

すがの 14. 菅野遺跡 第2次調査

1. はじめに

菅野遺跡は神戸市西区櫛谷町松本に所在する。明石川とその支流である櫛谷川の合流点から約2.5km遡った、櫛谷川西岸に面する河岸段丘上、標高約33~35.00mの地点に位置する。前年度の調査では、弥生時代中期~後期に属する竪穴住居址、古墳時代に属する竪穴住居址、掘立柱建物、平安時代に属する掘立柱建物等のほか、弥生時代~奈良時代にかけて存在したと考えられる自然流路が検出されている。また遺物は、弥生時代前期~近世のものが出土している。

今回の調査は、土地改良事業に伴う農道及び排水路敷設部分で、試掘調査の結果から、工事による遺構への影響部分である約1015.5m²について発掘調査を実施した。調査地は現在、水田となっており、段丘上から櫛谷川岸へと向かう緩やかな傾斜地となっている。発掘調査は全調査区をⅠ~Ⅲ区に分割しておこなった。



fig. 695
調査地位図
1:2,500

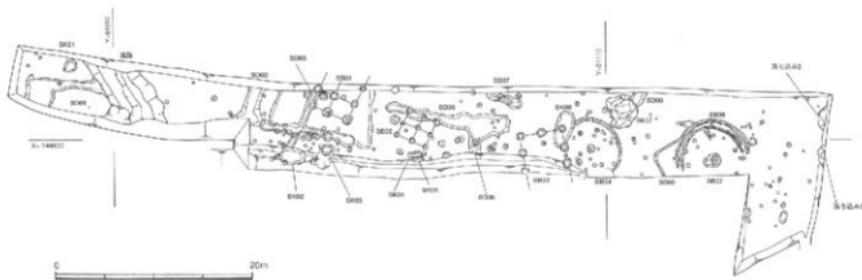


fig. 696 Ⅱ・Ⅲ区 遺構平面図

2. 調査の概要 I区は、台地上よりの土砂の流れ込みと思われる砂礫層が堆積している。確認された遺構は流路1のみである。幅は約1.6m、深さ検出面から約65cmを測り、北西から南東へ調査区を縦断する様に流れている。遺物は全く確認されておらず時期等については不明であるが、埋土が疊層中心となっているため、長期間をおかずして埋没した状況が考えられる。この流路は、II区または、前回の調査で確認されている流路へ流れ込んでいる可能性が考えられる。

II 区 II区は南北が8m、東西が60mの調査区であり、東に向かって緩やかに傾斜している。基本層序は、現代の盛土、耕作土の下に近世以前の洪水砂、中世の洪水砂が存在し、その下層の明褐色粘土（地山）で遺構確認調査を行った。

竪穴住居 復元直徑約6.0mを測る円形住居であり、S K06に切られる形で検出された。後世の削平によって深さは2~20cmを残すのみである。主柱穴は5本乃至6本と思われる。周囲には幅約20~30cm、床面からの深さが1~7cmを測る周壁溝が巡る。また住居の中心には、長径84cm、短径70cm、深さ約41cmの中央上坑が検出され、中からは弥生時代中期に属する器高約40cmの壺が、東に口縁部を向け、寝かせた状態で出土した。出土遺物より、弥生時代中期に位置づけられる。

S B05 S B05は、一辺5.95mを測る方形住居であり、S B06~08を切っている状態で検出された。後世の削平を受け、残存する深さは5~17cmである。主柱穴、周壁溝等の付属施設は確認できなかったが、直径約2mmのガラス製の小玉が出土している。出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



fig. 697 II区 全景（東から）



fig. 698 II区 全景（西から）

S B06 直径約7.65mを測る円形住居である。残存する深さは3~20cmである。主柱穴は、調査区外で未確認の部分もあるが、6本と推定される。周囲には幅30~40cm、床面からの深さ2~19cmの周壁溝が巡る。住居の中央には、長径1.68m、短径1.24m、深さ19cmの不定形の中央土坑が存在する。周壁溝からは礫石が2点出土した。弥生時代後期に位置づけられる。

S B07,08 S B06に切られる形で、周壁溝のみが検出された。S B07は直径約6.48mの円形住居である。周壁溝は幅15cm、深さ12cmを測る。弥生時代後期に位置づけられる。S B08はさらにS B07に切られている状態で検出された。残存状態が非常に悪く、幅15cm、深さ9cmの周壁溝が約2.0mのみ確認された。この住居も弥生時代後期に属すると推定される。

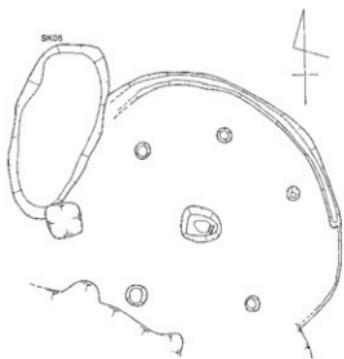


fig. 699 SB04 平面図

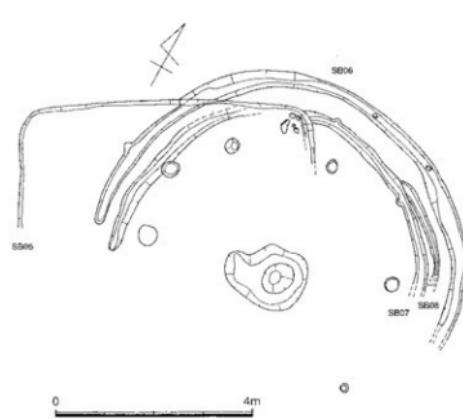


fig. 700 SB05・06・07・08 平面図

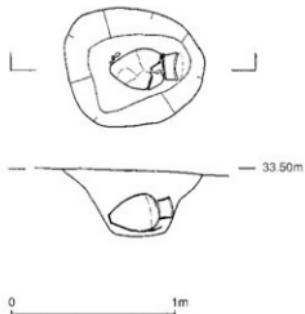


fig. 701 SB04 中央土坑 平・立面図

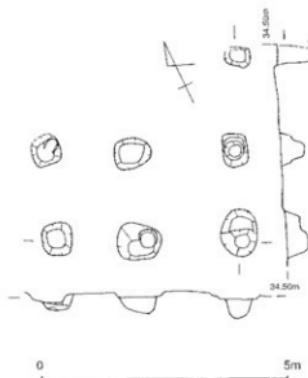


fig. 702 SB01 平・断面図

掘立柱建物 検出された掘立柱建物は3棟で、以下の表のとおりである。建物の南北軸が東側に振れるSB01と02、西側に振るSB03がある。SB01は奈良時代、SB02は出土遺物が僅少で時期決定し難いが奈良時代以降、SB03は古墳時代後期のものと考えられる。

造構名	規 模 (m)		柱穴間距離		構 造	時 期
	東西	南北	東西	南北		
SB01	2間(3.75)	2間(3.7)以上	1.7~2.0	1.9	総 杆	奈良時代
SB02	2間(3.75)	2間(3.75)	1.3~1.4	1.4~1.5	総 杆	奈良時代以降
SB03	2間(3.75)	2間(3.7)以上	2.1	1.8	側 杆	古墳時代後期

溝 溝は8条検出されている。それぞれの規模は以下の表のとおりである。SD02は、検出された造構群の西端に位置しており、自然流路の流路域と、住居域を区分するためのものではないかと考えられる。平安時代に位置づけられる。

造構名	幅 (m)	深さ (m)	造構名	幅 (m)	深さ (m)
SD01	0.6	0.1	SD01	0.8	0.2
SD02	1.4	0.4	SD02	1.1	0.2
SD03	0.7	0.2	SD03	0.9	0.4
SD04	0.6	0.1	SD04	1.1	0.3

土 坑 II区では土坑が7基検出された。規模は以下の通りである。このなかでSK06は、駁穴住居SB04を切る形で検出された。出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

造構名	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	造構名	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
SK01	1.3	1.2	0.1	SK05	1.1	1.0	0.5
SK02	2.4	1.6	0.7	SK06	3.7	1.8	0.6
SK03	1.0	0.9	0.7	SK07	3.1	2.6	0.4
SK04	1.4	5.0	0.6				

流 路 幅は約4.5m、深さは1.4mを測る。北西から南東方向に流れしており、埋土は大きく5層に分かれ。遺物は奈良時代と平安時代のものが出土しており、最下層が奈良時代にあたり、上層は平安時代に埋没したと考えられる。

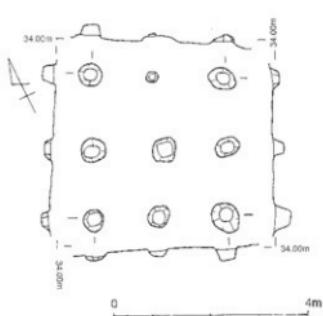


fig. 703 SB02 平・断面図

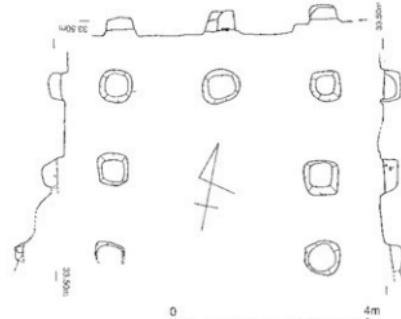


fig. 704 SB03 平・断面図



fig. 705 SB04



fig. 706 SB06・07・08



fig. 707 SB04 中央土坑検出状況



fig. 708 同左の遺物出土状況



fig. 709 SB02



fig. 710 SB03



fig. 711 I区 全景

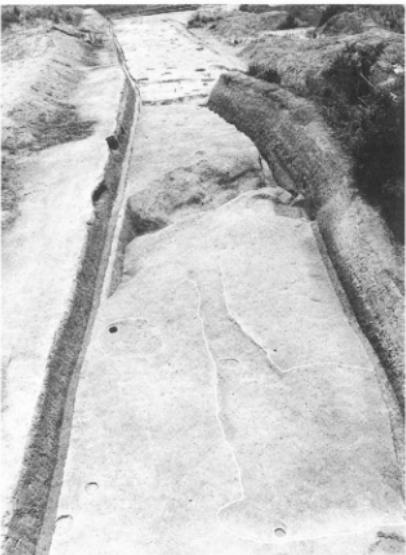


fig. 712 II・III区 全景

III 区 河岸段丘面から櫛谷川の氾濫原への地形変換点付近に相当する。遺構は褐色砂疊層（地山）の上面で、平安時代に属する土坑1基、ピット26基が確認された。

出土遺物 I区では、遺物は全く検出されなかった。III区では、遺物包含層より弥生時代～近世の土器が、ピットからは弥生時代～平安時代の土器が検出された。II区では縄文時代～近世の土器、陶磁器類が28点入りコンテナで10箱出土した。土器以外では、縄文時代のスクレイバー、石鏃、弥生時代の敲き石等の石器類、弥生時代のガラス玉等が出土している。

3.まとめ 今回の調査では、弥生時代中期から平安時代にわたる遺構が同一遺構面で検出された。調査区域に制約があったため、正確な規模が未確認に終わった建物もあったが、これは今後、菅野遺跡の集落構成や抜がりを検討、考察する上で重要な成果である。

また、流路は、1次調査で検出された流路が弥生時代後期～奈良時代に属するものであったのに比較するとやや時代が降るようである。しかし、もともと弥生時代に存在した流路を切って流れているとも考えられるため、1次調査で検出されたものの上流部にあたる可能性があるが、今回の調査ではその確証が得られなかつたため、今後の調査による新たな資料の増加が期待される。

せいしん 15. 西神ニュータウン内第62地点遺跡

1. はじめに

西神ニュータウン内62地点遺跡は、権谷川の右岸、権谷川の支流菅野谷川と権谷川に挟まれた小高い舌状の河岸段丘を中心に拡がる遺跡である。昭和56年度に実施された西神ニュータウン建設に付帯する菅野谷川の河川改修工事に伴う発掘調査で発見された。第1次調査では、菅野谷川の右岸で弥生時代中期の円形堅穴住居が検出され、また左岸での第2次調査では、古墳時代の堅穴住居、平安時代の掘立柱建物などが検出された。以後、遺跡の発掘調査は圃場整備事業の進捗に伴って、権谷川右岸斜面で調査が実施され、弥生時代中期～平安時代の遺構・遺物が検出されている。これまでの調査から推定される遺跡の範囲は南北約500m、東西約300mと考えられる。



2. 調査の概要

今回の調査は、7次調査となり、段丘突端の最高位にある標高38~39mの比較的平坦な水田である。調査は重機械によって耕作土・床土を除去して、圃場整備の工事計画上緊急を要する調査区東端にあるA区から調査を実施し、調査途中で計画変更となった西南部をC区とし、全調査区をA~Cに区画して調査を実施した。

A 区 検出された遺構は、古墳時代堅穴住居 4 基、古墳時代掘立柱建物 7 棟及び土坑 2 基である。他に、中世の小皿が出土した直径 20cm 前後の柱穴 16ヶ所を検出したが、建物としてはまとまらなかった。調査区中央から南東にかけて遺物包含層が存在した。



fig. 714 遺構平面図

掘立柱建物

検出された7棟の掘立柱建物の規模等の計測値は下表のとおりである。建物の方向は概ね北に対して東に振り、北30° 東前後の方針を探る。なかでもSB07・09はほぼ同一方位を探り、規模もほぼ同じであることから同時期に存在した可能性がある。さらに重複状況から時期に建てられた建物群と想定される。SB08は建物群内唯一、束柱を採用していて、建物北東部を深く削平されながらも柱掘形を残している。

遺構名	規 模	柱 間 寸 法	方 向
SB05	東西5.1m 南北6.4m (3間) (4間)	東西1.7m 等間 南北1.6m 等間	北29° 東(長軸)
SB06	東西8.4m 南北4.2m (4間) (3間)	東西2.1m 等間 南北1.6m×1.0m×1.6m(北から)	北24° 東(短軸)
SB07	東西4.5m 南北5.4m以上 (3間) (3間以上)	東西1.5m 等間 南北1.8m 等間	北31° 東(長軸)
SB08	東西4.2m 南北6.4m (3間) (4間)	東西1.4m 等間 南北1.6m 等間	北39° 東(長軸)
SB09	東西4.5m 南北5.0m 以上 (3間) (2間以上)	東西1.5m 等間 南北2.5m 等間	北31° 東(長軸)
SB10	東西5.0m 南北9.4m (2間) (4間)	東西2.5m 等間 南北2.5×2.5×1.5×2.5(西側柱) 2.5×1.5×2.5×2.5(東側柱)	北28° 東(長軸)
SB11	東西5.0m 南北5.4m (2間) (4間)	東西2.1m 等間 南北1.2m×1.5m×1.5m×1.2m	北20° 東(長軸)

表1 A地区検出 掘立柱建物一覧

堅穴住居

堅穴住居は調査区の東半部で4基検出した。4基の堅穴住居のうち西辺に竈を造り付ける。SB03・04は、何れもやや長方形の平面でやや同張りに壁体を造る。一方、北辺のコーナー付近に竈を造り付けるSB01は、一辺が8mある大型の堅穴住居で、壁体も直線的に造っている。堅穴住居の規模等の計測値は下表のとおりである。

遺構名	形状	規 模	柱 間 寸 法	時期・出土遺物
SB01	方形	一辺8.0m 壁体20cm前後残す	北辺西コーナーに接して竈状のピット検出。堅穴住居の東側は水田により削平。支柱2ヶ所	古墳時代後期 竈内から須恵器
SB02	方形	規模不明 壁体20cm前後残す	堅穴住居の東部はSB01によって削平、北西コーナーのみ残存	時期不明
SB03	方形	東西6.2m 南北5.4m	西辺中央に袖部を良好に残す竈検出。竈の前庭部で土師器壺・須恵器出土。	古墳時代後期
SB04	方形	東西6.4m 南北6.0m	西辺中央に竈状のピット検出、支柱は4ヶ所 堅穴住居北辺は谷状地形により削平	古墳時代後期

表2 A地区検出 堅穴住居一覧

土 坑

調査区の西部で4ヶ所、東部のSB04の上面で1ヶ所の上坑を検出した。SK01は、長軸1.5m、短軸1.1m、深さ30cmの楕円形の七坑である。SK02・03は不定形な土坑で、SK02は、長軸1.7m、深さ15cm前後の断面形舟形状の落ち込みである。出土遺物は、土師器片・須恵器片が多数出土している。SK03は不定形上坑で、長軸2.0m、深さ10cm前後で、炭・灰が含まれることから、堅穴住居の竈の痕跡である可能性がある。SK04は、長軸2.5m、短軸1.4mの楕円形土坑である。灰層が堆積していた。SK05は、長軸1.3m、短軸1.1mの楕円形上坑である。弥生土器高杯が倒立した状態で出土した。



fig. 715 A区 東半部

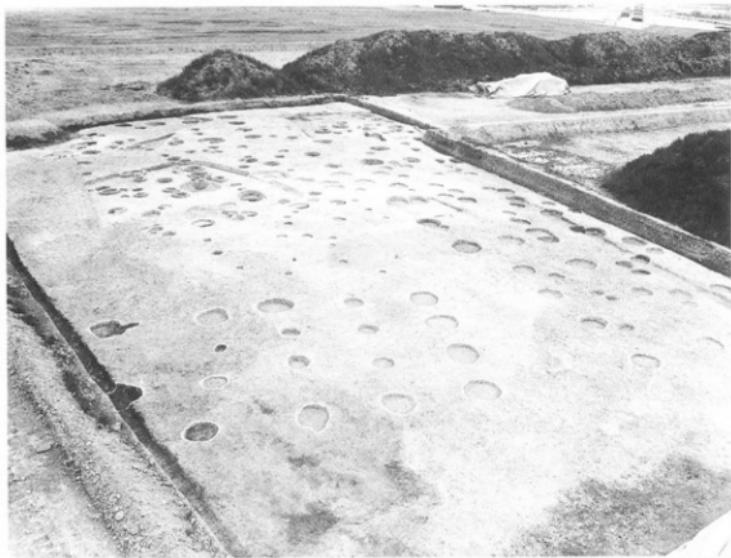


fig. 716 A区 西半部

B 区

掘立柱建物

B区の掘立柱建物は、調査区の中央から北西部と南西部に集中して検出された。北東部で検出したSB25は、一辺70cm前後の方形の掘形で、建物方向が北32° 東（短軸）とA区のSB07・09と同方位を採る点から、A区南西部の建物群に属すると考えられる。北西部のSB26は円形の柱掘形を掘り、桁柱の間隔が短い。また、埋形内から中世土器類皿が出土していることから、中世以降に建てられたと考えられる。調査区中央のSB27・28はいずれも一辺70cm前後の方形の柱掘形を掘り、建物方向が北29° 東（長軸）と、それぞれSB07・09と同方位を採る点からA区東部の建物と同時期の建物と考えられる。

遺構名	規 模	柱 間 寸 法	方 向
SB25	東西4.2m以上 南北3.6m (3間以上) (2間)	東西1.5m 等間 南北1.8m 等間	北32° 東（短軸）
SB26	東西7.0m 南北3.5m (6間) (2間)	東西1.2m 等間 南北2.0×1.5(東側), 1.5×2.0(西側)	北19° 東（短軸）
SB27	東西5.3m以上 南北7.0m (4間以上) (3間)	東西1.8m×1.1m×1.1m×1.4m(西から) 南北2.5m×2.3m×2.2m(北から)	北23° 東（長軸）
SB28	東西4.2m 南北6.4m (2間) (5間)	東西1.75m 等間 南北1.8m 等間	北29° 東（長軸）
SB29	東西4.5m 南北5.0m以上 (2間) (4間)	東西2.0m×1.5m(西から) 南北2.0m×1.5m×2.7m×2.0m(北から)	北9° 東（長軸）
SB30	東西1.5m以上 南北7.0m (2間以上) (3間)	東西1.3m 南北2.0m×1.5m×2.7m(北から)	北21° 東（長軸）
SB31	東西7.2m 南北7.0m (3間) (2間)	東西2.4m 等間 南北2.0m 等間	北40° 東（短軸）
SB32	東西6.8m 南北5.4m (2間) (2間)	東西1.7m 等間 南北1.7m 等間	北45° 東（短軸）

表3 B地区検出 掘立柱建物一覧

竪穴住居

竪穴住居の概要は、表4のとおりである。調査区中央で検出したSB12はSB19・18・15の順に繼起的に営まれ、その時期はSB19・18出土の須恵器TK216からSB15埋め土内出土TK23の時期と考えられる。これに引き続いてSB35(TK10)、SB16(TK43)まで窓を造り付ける竪穴住居が営まれ、掘立柱建物に移行する。一方、窓出現以前の古墳時代の竪穴住居は室内炉をもつSB23、貯蔵穴を設けるSB22・37が検出された。



fig. 717 B区 全景



fig. 718 B区 掘立柱建物 SB26

弥生時代の竪穴住居は、調査区の西端で後期の円形住居1棟、西南端で中期の五角形住居1棟を検出した。五角形住居はやや隅が丸く、中央土坑からの排水溝を西側に設ける。

遺構名	形状	規 模	検 出 状 況	時期・出土遺物
S B12	方形	東西7.6m 南北8.4m	西辺中央に竪を造り付ける。支柱は4ヵ所。中央西よりに貯蔵穴を設ける。	古墳時代中期 重複状況から
S B15	方形	東西2.2m以上 南北5.5m	西辺中央に竪の痕跡と考えられる土坑を検出した。支柱は不明。S B18を切る。	古墳時代後期 重複状況から
S B16	方形	東西5.5m以上 南北2.5m以上	西辺中央に竪の痕跡と考えられる土坑を検出した。支柱は1ヵ所を検出。S B19を切る。	古墳時代後期 重複状況から
S B17	方形	東西5.5m以上 南北3.5m以上	西辺中央に竪の痕跡と考えられる土坑を検出した。支柱は不明。	古墳時代後期
S B18	方形	東西2.7m以上 南北6.0m以上	西辺南よりに竪を造り付ける。竪内から須恵器片出土。S B19を切る。	古墳時代中期 T K216須恵器
S B19	方形	東西5.5m以上 南北7.5m	西辺北よりに竪を造り付ける。床面から須恵器片出土。S B12を切る。	古墳時代中期 T K216須恵器
S B20	方形	東西4.5m 南北6.0m	北辺東よりに竪の痕跡と考えられる土坑を検出した。下層にS B22を検出。	古墳時代後期
S B21	方形	東西5.7m 南北5.0m	西辺中央に竪の痕跡と考えられる土坑を検出した。支柱穴は4ヵ所。	古墳時代後期
S B22	方形	東西6.3m 南北6.0m	北西隅に貯蔵穴。支柱穴4ヵ所。 炉は不明。	古墳時代中期
S B23	方形	東西6.5m 南北6.5m	中央に炉跡。支柱穴4ヵ所。 床面より上部器高杯出土。	古墳時代中期
S B24	円形	直径8.5m	北側に突出部。幅1.0mの高床部がめぐる。支柱は5ヵ所検出。住居の周囲に小柱穴。	弥生時代後期
S B35	方形	東西5.0m 南北4.0m以上	西辺中央に竪の痕跡と考えられる土坑を検出。 支柱穴は2ヵ所検出。支柱穴から須恵器出土。	古墳時代後期 T K216須恵器
S B36	五角形	東西7.0m以上 南北8.2m	S B23・21の下層で検出。コーナー部は隅丸。 中央部に炉状ピット。床上より石器片出土。	弥生時代中期
S B37	方形	東西5.4m以上 南北5.0m以上	北西隅に貯蔵穴。支柱穴2ヵ所確認。	古墳時代中期

表5 B地区検出 竪穴住居一覧（その2）

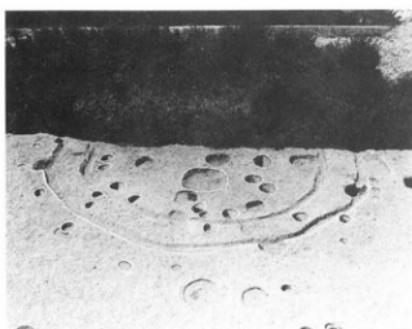


fig. 719 竪穴住居 SB24



fig. 720 竪穴住居 SB36

その他の遺構

住居址以外の遺構には、土坑2基と溝状の不明遺構1ヶ所がある。

S K06は、S B12・19の埋没後に掘り込まれた不定形な土坑である。南北1.5m、東西2.0mを計測する。断面は舟底状である。須恵器腹・壺腹片など多数出土した。

S K07は、S B19の埋没後に掘り込まれた梢円形土坑で、長径1.8m、短径1.5m、深さは18cmを計測する。断面形は皿状である。出土遺物はない。

S X01は、S B36の東側で検出した溝状の遺構である。検出当初、弧状の溝として検出したが、少し削り込むと2ヶ所の梢円形の土坑状の落ち込みとなる。南側の落ち込みは、長さ2.5m以上、幅80cm、深さ20cm前後を測る。断面形は逆台形である。埋め土内からは、弥生土器片が出土した。北側の落ち込みは、長さ1.9m、幅0.5m、深さ20cm前後を測る。埋め土内からは弥生時代の壺形土器が出土した。

C区
掘立柱建物

多数の柱穴を検出したが、その多くが浅く遺存状況は良好ではない。調査区の中央北よりで2棟の掘立柱建物を検出した。いずれの柱掘形も丸く、深さも20cm前後しか残存していない。掘立柱建物の規模等は下表のとおりである。

遺構名	規 模	柱 間 寸 法	方 向
S B13	東西4.0m (3間) 南北3.5m (2間)	東西1.5m×1.25m×1.25m 南北1.5m×2.0m	北30° 西(短軸)
S B14	東西4.8m (3間) 南北4.0m (2間)	東西1.2m×1.25m×2.3m 南北2.0m等間	北37° 西(短軸)

表6 C地区検出 掘立柱建物一覧

その他の遺構

C区のその他の検出遺構には、耕作溝と考えられる溝2条と調査区を横断する溝1条、不定形土坑S K08を検出した。

調査区を横断する溝S D01は、幅30cm、深さ10cm前後の断面U字形の溝である。溝内からは、土師器片が出土している。

不定形土坑S K08はS B13の西側に接して掘られた土坑である。東西5.5m以上南北2.0mの規模があり、深さ30cm前後を計測する。土坑内からは奈良時代～平安時代前半の須恵器が出土した。



fig. 721 C区 北半部



fig. 722 掘立柱建物 SB13

3.まとめ

今回の調査では、弥生時代中期～古墳時代全般そして奈良時代・平安時代と中世に至る遺構を検出した。その遺構の密度・重複状況は、過去の西神62地点遺跡におけるどの調査よりも密度が高く、複雑な遺構の重複状況であった。

このような遺跡内での状況は、本調査区域が遺跡の中心部であった可能性を示唆しているといえる。特に、B区での古墳時代中期の竪穴住居は、比較的短期間に建て替えを行っていた。また、下層には貯蔵穴をもうけるが、竪穴住居もあり、竪穴と貯蔵穴を共に設けるSB12へ直接の移行があったとも考えられよう。遺物の検討が充分できていないため、明確ではないが、炉を設ける竪穴住居と造り付け竪穴への集落内の移行を考えるうえで良好な資料と思われる。

いずれにせよ今回の調査では古墳時代前期の竪穴住居から後期後半の掘立柱建物まで、古墳時代全時期にわたって西神62地点遺跡の集落は営まれ、穂谷川中流域の古墳時代の中心集落であったことが明らかになったといえる。



fig. 723 調査地全景（北から）

こうづばしおか 16. 高津橋岡遺跡 第5次調査

1. はじめに

高津橋岡遺跡は、西区を流れる明石川と権谷川との合流地点の東側丘陵上に位置し、過去4回にわたる発掘調査で弥生時代～中世の複合遺跡であることが明らかになった。

今回の調査は造成地内における進入道路設置工事に伴うもので、中世～近世の遺構、弥生時代～近世の遺物が確認された。

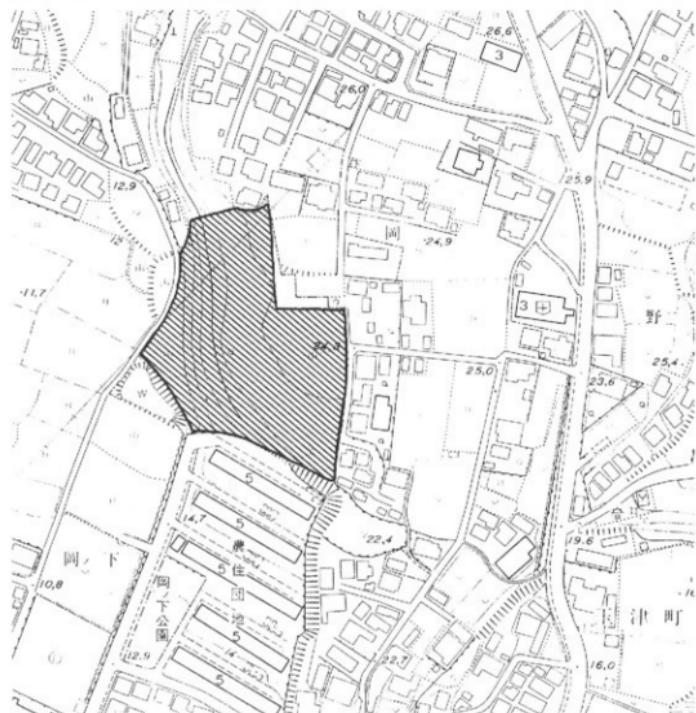


Fig. 724
調査池位置図
1:2,500

2. 調査の概要

1～3区の調査区を設定し、調査を進めた。

1・2区の調査については、その層位の状況から、トレンチ調査に切替えて行い、6ヶ所のトレンチ（1～6 tre）を設定した。その結果、いずれのトレンチからも遺構・遺物が確認されなかった。

3区については、先述したように中・近世の遺構が確認された。遺構面は地山面で、東半部は表土又は現代耕土の直下が遺構面（地山面）となる。西半部については、表土と遺構面（地山面）との間に層厚5～20cmの流土層を有し、西へ行くほどその厚みを増す。以下、3区の調査について記す。

掘立柱建物 調査区の東半部で3棟（SB01～03）確認された。いずれも、柱間が1.8～2m、柱穴は径が約30～60cmで、深さが約20～60cmである。

SB01は南北7間×東西2間以上で、SB02・03はそれぞれ2間×3間の規模である。これらの建物の時期は、柱穴内の出土遺物からSB01は13世紀頃、SB02・03は14世紀末～15世紀初頭頃と考えられる。



fig. 725 3区 速構平面図

埋甕遺構 埋甕と考えられる土坑状遺構が14基（S I 01～14）確認された。平面形状・規模はさまざまではあるが、円形または不整円形を呈し、径約50～90cm、深さ約20～50cmを測る。

このうち甕の胸部以下が元位置で残存していたものはS I 11～14で、S I 01・08・10からも、甕の破片がまとまって出土している。大甕の大きいものでは、最大径が80cmを越えるもの（S I 12）がある。甕は確認されたものはすべて備前焼大甕で、14世紀末～15世紀初頭頃のものと考えられる。この埋甕については、内容物などが遺存していないため、今のところ用途については不明であるが、何かの貯蔵施設である可能性が高い。

土坑墓 1基（S T01）確認されている。梢円形状を呈し、長径約1.8m、短径約1m、深さ約50cmを測る。時期は出土遺物から14世紀末～15世紀初頭頃と考えられる。

S X01・02、S K01・02についても土坑墓の可能性があるが、詳細は不明である。S X02については、S I 13を切るような形で掘られており、S T01と同様に14世紀末～15世紀初頭頃の遺物が出土したものの、時期は不明である。

その他の遺構 井戸状遺構（S E01・02）が確認されたが、いずれも近世以降の所産と考えられる。また、S D01・02などの小規模な溝状遺構が確認されたが時期は不明である。



fig. 726 3区 全景



fig. 727 3区東半部全景



fig. 728 3区 埋甕遺構 掘出状況



fig. 729 3区 埋甕遺構 SII1

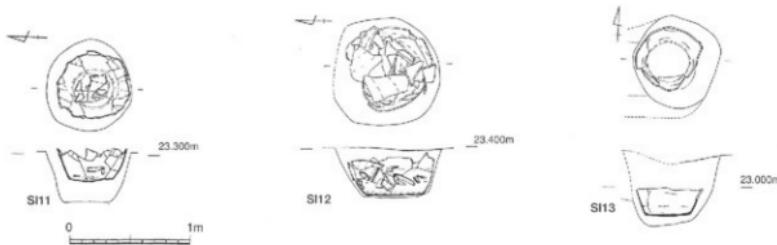


fig. 730 3区検出 埋壺遺構 平面図・断面図

出土遺物 大半が中世以降のもので、最も多いものが14～15世紀頃のものである。特に日につくのが備前焼で、埋壺遺構の他にS T01、S X01・02、S B02・03等からも出土している。

土器以外には古錢があり、S T01、S I 13等から洪武通寶（1368年初鑄）・永樂通寶（1408年初鑄）が数枚出土している。また、埋壺遺構やS T01、S X01・02、流土層中より焼土や炭とともに鋳型が確認されている。いずれも小碎片で、使用目的は不明である。

3.まとめ 今回の調査で最も大きな成果は、中世後期にあたる時期の遺構が数多く検出されたことである。特に、14世紀末～15世紀初頭頃の備前焼大甕を埋設する埋壺遺構は、高津橋岡遺跡では初めての発見と言うだけでなく、市内あるいは県内でも例の少ないものである。

これらの埋壺遺構の他にも14世紀末～15世紀初頭頃の遺構（S B02・03等）が多く存在しており、当時に同地域において比較的大規模な集落が形成されていたことが窺える。

数点の鋳型片の出土は同集落において鋳型を用いた何らかの生産活動を行っていたことを示唆するものであり、高津橋岡遺跡の性格を解明していく上で重要なこと。

また、流土層あるいは攪乱内からではあるが、弥生時代後期や古墳時代後期の遺物も出土しており、近接地に同時期の遺構等が存在する可能性が高い。過去の調査成果とも関連させて高津橋岡遺跡における各時期の集落構成や様相を検討していく必要がある。



fig. 731
調査地全景
(北上空から)

たまつたなか 16. 玉津田中遺跡 第12次調査

1. はじめに

前年度に引き続き、農道交差点から約110m分を調査範囲（調査地位置図参照）として重機により、掘削を開始した。試掘調査の結果から盛土分の残土は調査区南側道路部分へ仮置き、旧地表から遺構面までの残土は調査区の東と西側に仮置きした。

第1遺構面から第2遺構面、第2遺構面から第3遺構面への掘削は、その都度人力で断ち割りと試掘を行い。重機を使用して次の遺構面へと調査を進めた。なお第1遺構面と第3遺構面については、航空写真測量を行った。調査後埋め戻しを行い、現況に復旧した。



fig. 732
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

遺構面は前述のよう合計3面検出された。基本層序は調査区北半では、現代盛土層・旧水田面床土・褐色砂泥（中世の遺物を少量含む層）・黄白色泥砂（洪水砂）・褐色泥砂（第1水田層）・黄褐色砂泥・青灰色砂砾・青灰色泥砂・暗灰色砂泥（第3水田層）・黒色粘質砂泥・淡青灰色泥砂となる。調査区南半では現代盛土層・旧水田面床土・灰色砂砾（洪水砂）・赤褐色泥砂（洪水砂）・黒灰色砂泥（第2水田層）・青灰色泥砂・暗灰色砂泥（第3水田層）となる。

第1遺構面

第1遺構面では、水田と島状遺構と溝状遺構が検出された。水田は全部で21区画分検出された。畦畔が切れた状態ではないが、水口と考えられるものが2箇所検出された。また畦畔の残存状況は良く高さ0.1mほどで検出されたものが多い。水田の標高は20,000(北端)～19,800m(南端)である。

調査区中央部で、水田を覆う洪水砂を削除すると南北約11m・東西約5m・水田面からの比高差約0.3mの規模で、島状遺構が検出された。島状遺構を形成する土壤は、北側の水田を形成する土壤と同質である。この島状遺構から南へし字状に畦畔状の高まりが検出された。島状遺構から南は灰色砂礫の洪水層が調査区南端まで覆う。これは調査区北半を覆う洪水砂とは全く異質な堆積物である。島状遺構の断ち割りを行った際に弥生時代後期と思われる土器が少量出土した。

調査区南端では、灰色砂礫の洪水層を切ってSD101が検出された。幅4.8m・深さ0.6mの溝状遺構である。遺構内から土師器小型壺の体部と須恵器坏蓋と土師器と須恵器の小破片が出土した。須恵器坏蓋から7世紀中頃の遺構と考えられる。

第1遺構面の水田の時期は、水田を覆う洪水砂や水田層からの出土遺物が少量で直接に時期を決めがたい。層序と僅かな出土遺物から弥生時代後期から古墳時代始め頃の時期と考えておく。

第2遺構面

第2遺構面は、調査区南半のみで水田が検出された。区画として数えることができるものとして8区画が検出された。第1遺構面より畦畔の残りが悪く14区画分以上の水田であったと推定される。水田の標高は19,550(北端)～19,150m(南端)である。水田層の断ち割りなどからは遺物は出土しなかった。また水田層を覆う赤褐色泥砂の洪水層からは微量の弥生土器が出土したが時期を決定できるような遺物はなかった。



fig. 733 第1遺構面 全景



fig. 734 第2遺構面 全景

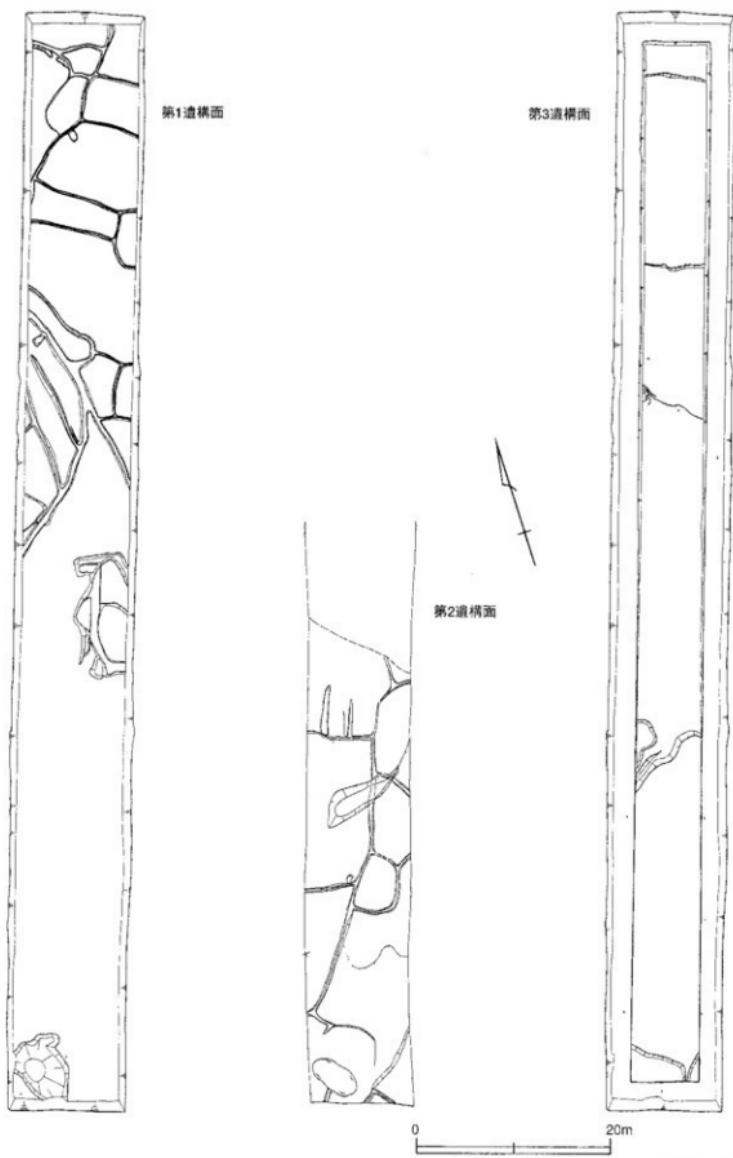


fig. 735 造橋平面図



fig. 736 SX301



fig. 737 SX301 杖検出状況

第3遺構面

調査区の北から3分の2までは、青灰色砂疊層と青灰色泥砂とが0.5~0.8mと厚く堆積し水田面が徐々に下がっていくが(19.000~18.600m)、青灰色砂疊層がなくなり水田面が約0.5m上がる(19.100m)。基本的には南に下がる地形であるが、いったん微高地状にあがるような地形は、第6次調査や第7次調査では見られなかった。これまでの調査成果を含め、今後検討を加えたい。

水田には畦畔は残らず、段だけが残る状態であった。調査区中央部では段上に杭列が検出された。杭は8本検出され、杭の直径は0.04m前後のものと割木を杭にしたもののが2本検出された。杭列の存在する部分が水田層が厚くなっていた。人為的な遺構というよりも自然の落ち込み(SX301)と考えられる。SX301の規模は、東西2.5m・南北1.5m・深さ0.6mである。この落ち込みの底から枝をはらった程度の加工木が5本と木屑が検出された。落ち込みがあったため畦畔が崩れやすかったのであろうか、このための土留めであろうかと考えられる。

出土遺物は、水田を覆う洪水面と水田層から弥生時代前期の土器が僅かに出土した。特に水田層に含まれる土器は、前期の中頃と判断される。

3.まとめ

前述のように第1・3遺構面の時期はある程度言及できるが、第2遺構面については、遺物の出土がなく時期は決めがたいが、層序のみで判断すれば、第1・3遺構面の中間あたりかと思われる。

今回の調査では、第6・7次調査と同様に弥生時代には、いわゆる生産域であったことが判明した。当調査地を中心とすれば直徑約300mの広大な面積が水田域であったと想定される。すべてが同一時期に水田として耕作されていたとは言いがたいが、これによって支えられる人口も少ないものとはいえないであろう。

さて、この水田域を耕作していたムラは、水田に遠くに存在していたとは考え難いが、現状の調査成果では判明していない。昭和57年から平成3年頃にかけての県教育委員会の調査や平成5・6年度第8次調査では、弥生時代前期の住居址や貯蔵穴群の検出があり集落が存在を窺わせるが、どちらも700~800mとやや遠いものと考えられる。いずれにせよ弥生時代前期の水田の時期がある程度明らかとなったことは、大きな成果と言えよう。

IV. 平成8年度の大規模試掘調査

概要

神戸市では、各種開発・造成工事に伴い、埋蔵文化財の存否を確認する試掘調査を実施している。主として、住宅建設等に伴う小規模な試掘調査は、今年度は218件であった。その結果、新たに御船遺跡の発見があり、上沢遺跡についてもその範囲の拡大があった。それ以外に、大規模な地形改変を伴うものとして、土地区画整理事業および土地改良事業などがあり、毎年広範な地域で試掘調査を実施している。これらの試掘調査によって、新たに発見される遺跡があるのはもちろんあるが、周知の遺跡でも、その範囲内での遺構の状況等が明確になり、遺跡のより詳細な内容が把握できるようになってきている。

平成8年度に実施した大規模土地改変に伴う試掘調査は、土地改良事業に伴うものとして北区淡河町勝雄地区、本町地区、北僧尾地区、野瀬地区、北区八多地区、西区丸塚地区的各土地改良事業がある。

北区淡河町勝雄地区では、昨年の試掘調査で淡河八幡、天満神社周辺がその中心であることが明らかになったが、その南側にも遺構の広がりが確認された。野瀬地区、北僧尾地区では、小規模な尾根筋に中世の遺構や遺物包含層が確認された。

八多地区では、詳細な遺跡の範囲の確定を行う為に実施され、日下部遺跡地内では有野川左岸の微高地に古墳時代後期と平安時代末から鎌倉時代の集落を、八多中遺跡では、弥生時代末期から古墳時代初頭、中世の集落の存在を窺わせる資料を得ている。

西区丸塚地区では、事業地内に古墳時代及び中世の水田、遺物包含層が確認された。その後調査が実施され、中世の掘立柱建物や弥生時代後期の堅穴住居等が検出された。試掘調査は、基本的に平面2mの方形で設定し、バッカ・ホーまたは人力により遺物包含層上面ないしは遺構面直上まで掘削し、その後、平・断面の精査を行っている。また、必要に応じてトレンチ調査で確認している場合もある。

大規模試掘調査一覧

事業名	遺跡名	試掘坑数	試掘面積	試掘調査結果
勝雄地区圃場整備事業	勝雄	295	660m ²	古墳時代の遺物包含層、奈良時代～平安時代の土器、中世の遺構（ピット等）・遺物
本町地区圃場整備事業		61	244m ²	遺構・遺物ともに未確認
北僧尾地区圃場整備事業	北僧尾	254	750m ²	中世遺物包含層
野瀬地区圃場整備事業	野瀬	187	420m ²	中世の遺構（柱穴・土坑）・遺物（須恵器・土師器・陶磁器）
道場・八多特定土地 区画整理事業	日下部 八多中	149	817m ²	中世遺物包含層・遺構（柱穴等）、古墳時代の須恵器、弥生土器、石器、近世の遺物
丸塚特定土地 区画整理事業	丸塚	19	243.6m ²	弥生土器、古墳時代以前の水田、古墳時代の溝 中世遺物包含層・遺構（水田等）

凡例



試掘調査
対象範囲



試掘調査
地点



遺跡存在
範囲

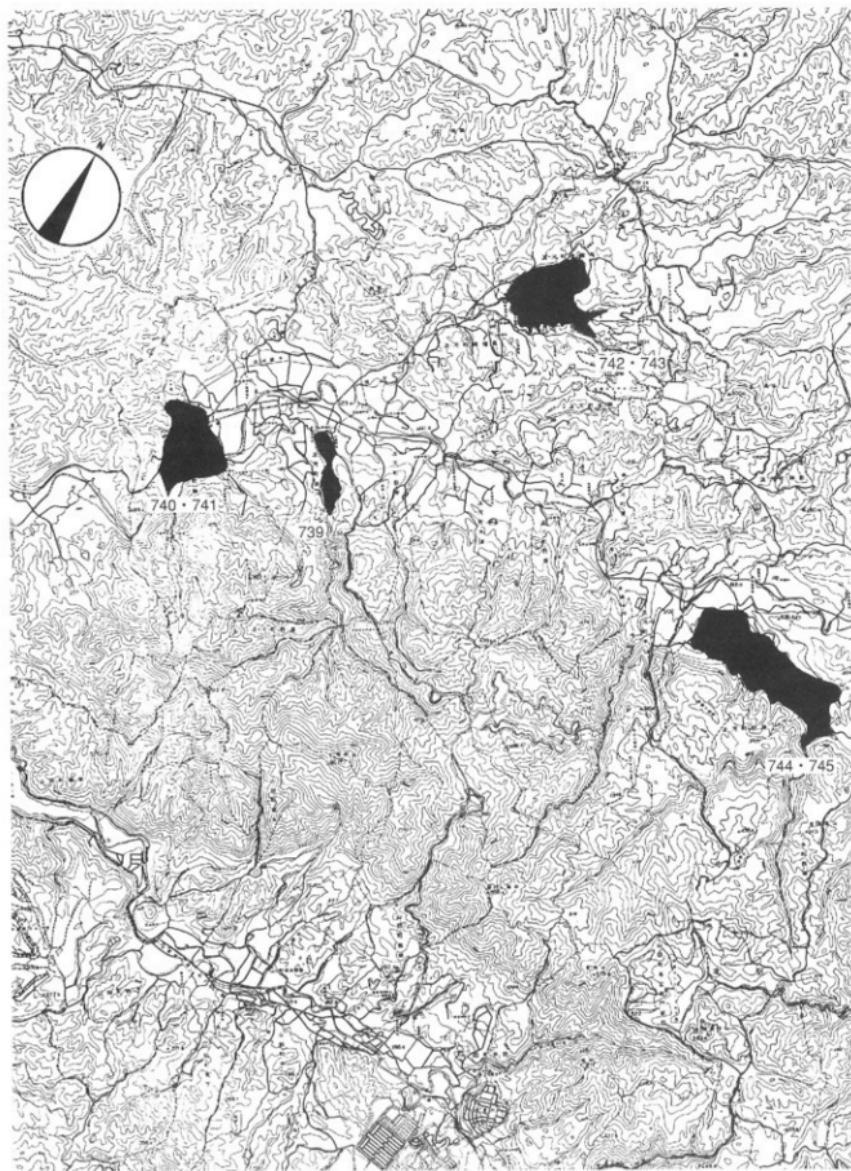


fig. 738 北区試験地塊全体図(1)

Fig. 739 沈阳市地区地质测量点 ($S = 1/5,000$)





fig. 740 藤雄地区試掘調査地点(1) ($S = 1/5,000$)